

家庭・保育所・幼稚園

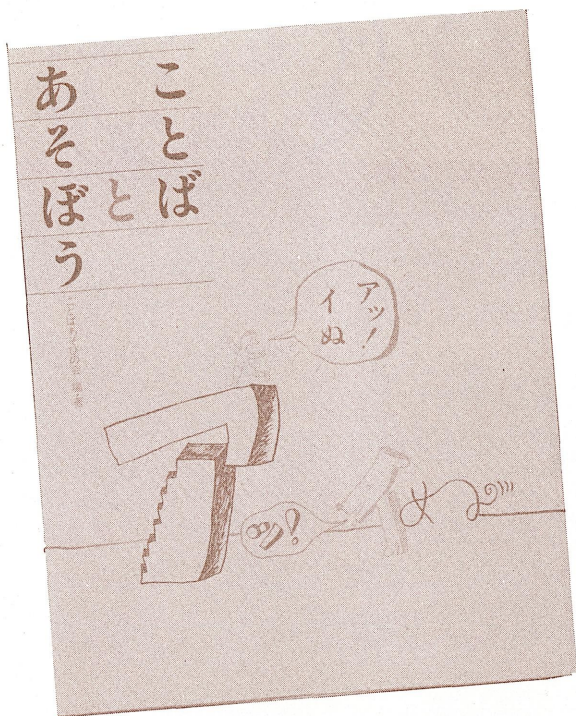
幼児の教育

9



第七十八卷 第九号 日本幼稚園協会

ことばとあそぼう



ことばあそびの会 編著

- B5変型判 102頁
- 定価1,000円+200円

詩人の谷川俊太郎、川崎洋らの創作詩をはじめ、伝統的ことばあそびを題材にして、ことばの意味よりもむしろ、日本語の面白さ、豊かさ、響きの美しさを、子どもたちとともに楽しめるように構成されています。

ことばとあそぼう

ことばあそびの会 作品

監修／谷川俊太郎

出演／波瀬満子

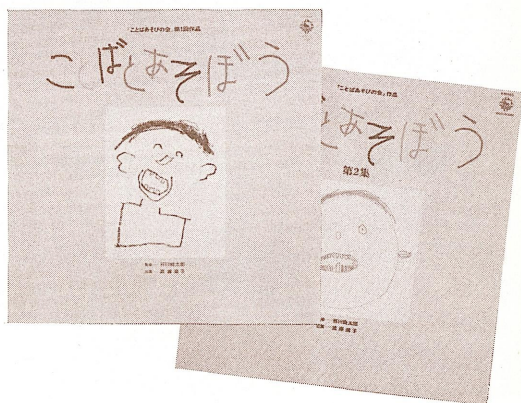
ステレオ30cmLP 各2,000円

第1集(SKD(H)483)

「日本語のおけいこ」ほか

第2集(SKD(H)549)

「あいうえお体操」ほか



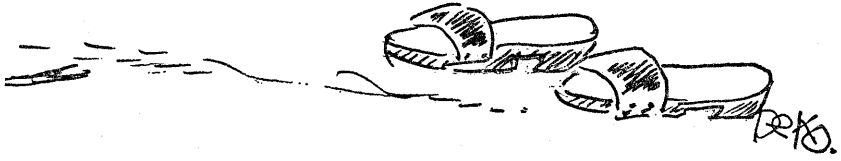
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十八卷 第九号





幼児の教育 目次

——第七十八卷 九月号——

© 1979
日本幼稚園協会

表紙	油野誠一
カッパ	中島英子
雑字と乱読	太田次郎(4)

★講演

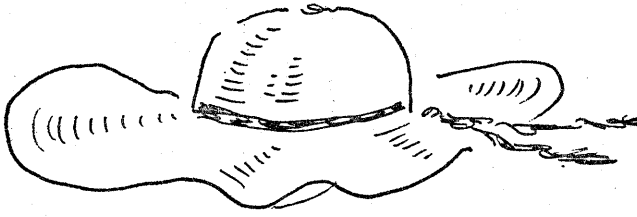
教育との出会い	周郷博(6)
---------	--------

「幼児の教育」復刻並びに復刻記念懸賞論文募集	(14)
------------------------	------

私の幼児教育論	田中裕次(16)
---------	----------

人でつづる保育史 石原キク先生	高橋フミ(22)
-----------------	----------

◇園長室の窓から



子ども本来の姿を求めて……………岡田鈴代…(28)

わき見のすすめ……………松隈玲子…(34)

わき見について……………田中平八…(36)

わき見のすすめ……………村田修子…(39)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その十二)……………海老沢敏…(42)

世界の子どもたち

カナダの幼児教育……………古賀嘉寿子…(48)

クリちゃんの動物園散歩(五)……………根本進…(52)

現職研究レポート

その一 且幼稚園の場合……………角能清美…(56)

雑学と乱読

太田 次郎

この何年か、入学行事のガイダンスの中で、附属図書館について一言いわねばならないことになった。そこで、いつも「雑学と乱読のすすめ」を話している。

昔から、読書といえば、「すぐれた古典をひもとけ」、「良書を精読せよ」といわれるし、学問は「狭くても深いのが良いのであって、浅くて広いのは価値がない」とされている。

生来、生真面目が欠けていて、何事にも好奇心をいだいて、「わき見専門の人間」であるから、新人生の前で気づいてみてもしかなかったとあきらめて、やや逆説的な話をするこ
とになる。

ある年、極端な乱読の例として「文学全集を片っぱしから読破するのも一つの方法である」といったら、素直な新人生が早速図書館にやって来て、実行し始めたこと知らされた。何か罪深いことをすすめたような感じがして、それ以後は少

しつっしんだ発言をしている。

いうまでもなく、人間の一生は限りがあり、その間に送れる「知的生活」の時間は、さらに限られている。そんな貴重な時間を浪費するのはもったいないと考える人にとっては、乱読や雑学はおよそ無縁のようにみえる。

しかし、知的生活について説く人々の本を読んでみると、例外なくたいへんな読書家であって、結構乱読を楽しんでおられるのが、行間ににじみ出ている。

大体、初めから精読のみをしようとしてもできるわけはないであろう。能率化を目ざして、他人がリストアップしたいわゆる良書に頼るという心がけ自体が、読書人としての資格を欠いているのではなからうか。ある本が面白いかな否かは、読者の置かれた状況に依存することが多く、万人に興味があ

って、感銘を与える本ばかりになったら、この世は味気なくてやり切れないように思われる。

イギリス人の最高のぜいたくは、暖炉の前で、スコッチをちびちびなめながら、推理小説のページをめくっていくことであるといわれる。推理小説狂の筆者にとっても、「それを読むことが何の役にも立たないこと、そしてこの忙しい世の中でその役にも立たないことを楽しめる」のが価値があるのであって、「推理小説を読んで、論理的な思考力が養える」などといわれたら、全く白けてしまう。

読み終ってつまらなかつたら、時間を無駄にしたなどと考えないで、そのうちに面白いのにお目にかかれるかも知れないと、優雅な気持ちになる方が、幸せであらう。

雑学の方も、乱読とよく似ている。幅広く学んでおけば、専門を見直す広い視野ができるなどと考えない方がよさそうである。

なるほど、世の中には「学際」ということばや、その原語の「インターディシプリナリー」などという三度いったら舌をかみそうな変な語が流行している。環境や人口問題など人

類が直面する難問を解決するのは、狭い学問では駄目であつて、多くの専門家が学際的な視野で協力する必要があると説かれていいる。その通りかも知れないが、雑学とはそんな目的意識のはっきりしたものをいうことばではないと思われる。もっと気楽な加減なもので良いのではなからうか。

「おか目八目」にしても、うまく役立つことは少なくて、ふつうは「はた目にはわからない」方が多いようである。

人間は、行動に合理的な目的をいだけ動物といわれるし、特に日本人は真面目らしいので、何ごとも目的をはっきりさせないと満足できない性向があるらしい。

しかし、雑学も乱読と同じように、直接役立つことは保証できないと考えた方が良さそうである。

とにかく面白そうだから、ちょっと首をつっこんでみようと充分であらう。他人に迷惑をかけない限り、いろいろ聞いてみることは、それ自体楽しいことである。

世の中のことに目くじらばかりたてないで、どうせ一生は一度しかないと考えて、乱読や雑学を楽しむ人々がふえてきたら、今の世よりも住み良くなることは確かなように思われる。(お茶の水女子大学)

教育との出会い

周 郷 博



ぼくは、今日ここへくるのに小田原へ出て新幹線で東京駅を回って来ました。小田原でも、東京に着くといっそう、土曜日だし、やたらに人が大ぜいいて、遊びに行くらしいけれど、みんな、男も女も、とくに女の顔が「つくられた（つくり過ぎて、その人の顔がこわされている）」のにびっくりしました。東京駅でタクシーに乗ったら、タクシーの中にまでホテルの広告がくどく出ていて、一泊一万三千円もする。こんなに商業―商社利益ばかり振り回され、その利用に身を任されっぱなしの国なんて、ほかにほどこにもないように思

います。銀行強盗事件がつきつきと起こっているけれど、これは自然の成行きだと思えますよ。世の中、お金しか、その「お金」に「寄せる」しばしの「安全」「たのしみ」しかないふうですから……。

こういう今の状態を、どうしたらいいかというところ、教育の問題を考えて話すことですね。それは、人間の未来について語ることであり、過去について真面目に考え、環境―広い意味での―と人間の関係を考え、人間の生活―大昔からずっと続いている―について考え、その上で未来に対してどう

いうふうに責任をとるか、ということ。『教育との出会い』それは「人間との出会い」と一つのものであるはずだからです。

昨日、パリの友人からの手紙を受取りました。このペーターという人はO E C Dに勤めていますがとても日本が好きで、もし日本に職があれば日本で働きたいと思っている人です。子ども時代をすごした北ドイツで日本のことをいろいろ聞いて、とても印象がよかったです。その手紙を読みます。

「今、この西ヨーロッパではいろいろな問題をかかえています。まず『*Jobless*』、仕事がないこと、そのためにどう生きていかかわからない若者たちの犯罪がふえたこと、中年近くなった人々の、内的生活が空白になった、年寄りを捨てる―老人遺棄ということも多くなっている、それに、戦争に対する恐怖、心配、など」だといっています。

ぼくはこれを読んで、前にヨーロッパに行った時も多少感じたことでしたが、ひどくなったんだなあ、ショックでした。そして、『日本の新聞を読むと、日本でもいろいろな状態が、能の世界とか、桜の花がきれいに咲いている風景とか、

想像していた日本とは違ってしまったらしい、ということがわかります」ともいっています。

古来、プラトン、孔子、コメニウス、ベスタロッチ……、たくさん有名な人たちがいて、教育について考えてきました。教育という問題は解決できませんでした。それほどむずかしい問題なのです。ぼくは、今まで「教育の問題を考える」というと、自分の考えのせまい操作の中でやりすぎているのではないかという気がします。一人の人間が、どう生れ、どう生きるかは、その人間に「そなわっている」部分があるのではないかと思うのです。今年、三月十四日に生誕百年を迎えるアインシュタインは、学校も、いわゆる「よい成績」ではなかったし、「学校秀才」でも「よい生徒」でもない、先生の「おぼえ」のよかった子どもでもなかった。一九〇五年に特殊相対性理論を発表して一躍有名になりました。これは「教育の結果」ではなかったのです。人間の天性とか運命は、先生にはわかりません。それなのに、教育をしてこうすればこうなる、などというのは、人間を尊重していることでしょうか。「不確実性の時代」で有名なガルブレイスも、教育について次のようにいっています。

「経済的利益を目的にして教育をやつてはいけない。社会はどんどん変つていつているのだから」また、

「ある目標をたてて、この子をこういうふうにしようとしたら、そういうもくろみは大抵裏切られるものだ」と。

こうしようなどといって、天才になつたためしはありません。天性と運命—こういつた人知を超えたものを考慮に入れない教育は教育とはいえないと思います。そしてこれは、深い意味で人間を信じることです。日本では、人間と人間が信じ合つてゐるという関係は、ますます少なくなりましたね。

人が一緒にゐる意味がなくなりました。この意味は、出会いをするということ、お互いにわかり合えた喜びは自己を超えた喜びです。これが日本にはなくなつてきてゐるのです。

ヨーロッパでいま一番信頼されてゐるといわれる、オランダの老教育学者ランゲフェルトの著書には「教育は、子どもが、本当に信頼できる大人と出会つた時に生起するものだ」とあります。この「信頼できる大人」というのも日本ではあまり見られません。人間の子どもが、人間を信頼するといふ経験をするのは四歳位までです。そのころは血液も大人の倍くらい早く回つて体温も高く、眼も水晶体が美しく、まわりを美しく見ています。動植物、宇宙、すべてを含めた世界を

美しく見てゐるのです。そういう時代に、世界を愛し、信頼することを経験させなければいけないわけです。ところが今日本では、食物を食べすぎたり、テレビを見たり、勉強ばかりしてゐることがおおいし、子どもの体温が下つてゐるそうですね。

ハーバート・リードの自伝にあつたような美しい風景は、日本でもイギリスでももうなくなつてきています。風景というのは、何でも無いもののように思ふかもしれませんが、これは大切なものなのです。人が勝手に作つたものでもないし、かといつてそこになつてゐる一つの石ころでもない、特別な意味で、一つの世界です。パリの本屋でも、風景(Paysage)という題のついた本が多いのに驚きました。それがなければ、人間の生活は生活になり得ないところから、こゝうなつたのではないかと思ひます。ぼくは東山魁夷さんをととても羨しく思ひます。ノスタルジイのような、一つの世界—風景を画いていて、その風景は、人間がどう生きてゐるかといふことを教えていると思ふのです。川の流れ、人間の労働してゐる姿など、それがなければ生活はないのです。子どもは、一つの世界—仮説として風景—をつくる生物なのだと言フゲフェルトがいつてゐます。そこが、ダニなどと違つたとこ

るなのです。ダニは、温血動物で毛の生えている生物が下を通るのを何年でも待っていて、その毛の中へとびこむのです。しかし人間は、人間の生きている世界、画のような風景をえがき出すことのできる生きものです。そして教育は、大人とは違う、子どものもっている風景を保たせるように援助してやるという役目なのです。自分のまわりのもの、すべてを含めた風景を子どもがつくり上げるのは、二、三歳のころです。そのころテレビを与えれば、子どもは動くものが好きですから当然それに熱中します。人為的な刺激過剰によって「育つ」若い神経を破壊してしまいます。

ルドルフ・シュタイナーという人の教育「シュタイナーの学校」の考え方が日本でも、モンテッソーリとならんで注目されてきましたね。そのシュタイナーが「人間の発達のリズムを三つの層」として、例えばこんな見かたをしていることに注意してみたいと思います。

「眠っている状態 (Sleeping state of mind)」

「夢みている状態 (Dreaming state of mind)」

「目覚めてくる状態 (Waking state of mind)」

これは、人間の発達のリズムを成している三つの層です

が、私たちの日常生活にも、この三つの層は健康なものリズムとして働いているものです。赤ちゃんはまだ眠っている時間が長い。胎内の十ヶ月の激しい形成の「あとを受けて」からだは速い成長をとげていますが、人間の精神 (mind) は「まどろんでいる」状態——しらじらと夜が明けかけた状態です。三歳——そうして七歳で乳歯が抜けかわって永久歯が出てくる。そこが一つの節で、「自我」というものが、未だやわらかいかたちであらわれてくる。この七歳と、つぎの十三、四歳——ここからだにははっきりした変化が起ります。この七歳、十三、四歳という二つの節を軸にした、二十一歳（ここで、からだの成長はほとんど完成する）に及ぶ三つの層が発達というもののリズムの根幹を成しているとみるのです。が、十四歳になってやっと「考える——目ざめている状態」に達するといっても、そのまえの「眠っている（まどろんでいる）状態」「夢みている状態」がその下地になっており、意外な大切な積極的な意味をもっていることを重視しているのが、その特徴です。

長いこと葉であったものが、ある時、それが花になる、これは変ること——メタモルフィズム（変成）ですね。人間も同じで、赤ちゃんがだんだん変って大人になる。これは本能

的なもので、シュタイナーの考え方には基本的にはこの考え方があります。生物学者であったピアジェも、死が近くなつたところに「知能は本能を根にして出てくるものである」と面白いことをいっています。そして花という中国の漢字をよく見てみると、実によくそれを現わしています。草が花に「＋＋」で「化する」、変わるわけです。その花―中国の発音は「ホワ」です。はやくこの「化」―花が咲けばいいのでもない。およそ予定はたたないのです。何か外からできることは、葉に虫がついてまわりの草まで全部枯れてしまうということのないようにすることぐらいです。そしてよい土とよい風景の中においてやることです。

シュタイナーの三、四歳の子どもに対する考え方は、モンテッソーリのそれと殆んど同じです。モンテッソーリはこの時期を *absorbent mind*―まわりの世界と自分が分離してなくて、まわりの世界をいつのまにか「吸収する」時代だといっています。このようなシュタイナーの見かたは「子どもの中から子どもを見ていた」見かたといえます。人知学 *anthroposophy* は人間をふかく哲学する（考える）ということで、彼は本当に子どもを「愛して」いました。人間は、上の方から知、情、意にわけられますね。誰も「意」が頭の中

にあると思う人はないと思います。そしてこれは発達の順序にもしたがっています。赤ちゃんの頭はだから大きいですね。体の発達は一このように「遠心的」―アタマから胴体、手足という方向で発達する。しかし、精神的なものは一逆に「求心的」―手とか足とかの感覚がのびて発達していった。それから心が、そういうものを下地にできていくわけです。アインシュタインのような偉大な人もこうして形成されていったでしょう。しかし今は、逆になっていますね。今の子どもたちは、感覚の世界にふれることなしに、「夢みる状態」も省いてアタマだけに何やら「知識」だけつめこまれて、花の咲きようなない草のようになっているようです。

赤ちゃんは「意識」からいえば「眠っている」ような状態でお母さんの働く姿、チヨウの舞う姿などを夢見ます。そして自分の世界を「つくりあげて」いきます。まわりの世界を模倣し、まわりをとり入れている時代が、*Sleeping state of mind* の時代で、この時代に人類の文化をうけつぐ人間らしい人間の土台ができます。しかしその模倣の相手がいなければなりません。次の時代に必要なのは、「權威をもった」大人です。そして大人が信じられることです。先生が好きで、先生を模倣したくなる、そんな幼稚園の先生が必要になって

きます。そして十四歳すぎると脳が完全な形になり、同時に足の指の骨が完成して少年期を迎えるのです。こういう段階をへて成長していかないと、大人にしても、環境に対しても信頼ももてないわけです。

シュタイナー、モンテッソーリが注目されているのと同じように、ヨーロッパではヨガ、禅、柔道、空手、ハリキユウなどに対する関心が高まっています。しかし、ヨーロッパのような先進国が東洋文化に興味をもつもちは、日本が、ただ西欧文化（文明）を模倣し、追いつこうとしたのとはちよつと違うようです。異質文化の中から何かを見つけようとしている！今までのヨーロッパと違うことを考えよう、というところが起こってきているのです。面白いことに、ほくが偶然ロスアンゼルスで見つけた、イギリスのハリキユウ医学会会長という人の本には、「ヨーロッパでハリキユウを理解するためには、シュタイナーのように、人間のことを「内側から見る見かた」をするのがいいのではないか」と書いてあります。

中国の考えかたもまた面白いものです。中国では「氣」は天地全体に充滿しているものであって、人間は呼吸すること

によってそれを体内にとり入れているというのです。そしてその「氣」は「ウ、チと発音するらしいけれど、「ウ」のさかさなのです。面白いでしょう。この呼吸というのは、リズムをもっていて、それで血液が体中にゆきわたるわけです。シュタイナーの学校では、先生も子どもも一緒に、大きく呼吸をしたりするそうです。

イワン・イリイチという人もとてもいろいろな経歴、学識をもつ人ですが、今はメキシコにいます。このイリイチは、今までのような学校ではなく、「人間というものから」学校を考えています。これからはこういうことが起こってくる時代だと思えます。去年京都では、「アジアの人たちの「内発的、知的創造性」を考える」国際会議が開かれました。ヨーロッパ風の学校を作ってそこへ子どもをとこめるというのではなく、非ヨーロッパ世界でこういうことを考えるということ、世界のバランスのためにも重要なことでしょう。と同時に、子どもの、「内側から育ってくる」知的創造的な力をどういうふうにするかということを考える時期に来ているのです。運命、天性によって、子どもたちがどんな花を咲かせるかは、教師の力が及ばない。「計算を超ええるものがある」のだということを見つめて、教育は転換していかなければなら

ないのだと思います。子どものうちなる力を主体に、教育を
考えなければならぬ時代に来ているのです。これは医学も
同じで、健康を創造するのは当人なのであって、それ以上医
者は深入りをしてはいけないうのでしょう。急場の時に薬を与
えたりして助けることはしても……。教育が子どもの幸福を
創造する―してやるといふ考え方は、もつてのほかだと思
います。そしてこれからは、西欧文化と東洋文化がいかに助け合
うべきかということも、重要な問題になってくるでしょう。

最後に、今日の話に関連して、一昨年亡くなった野口晴哉
という人（整体協会の創設者）の大へん味わい深い語録を讀
んで終りにします。

これだけの仕事をしたら疲れると思っている人は、疲れ
る。

到底自分にはできないと思ったことは、できない。

しかし、一心にやりたいと思ひ込んでやっけて行く人は、す
らすらと為し得る。

やれると信じている人は、戸惑う。

体力ができたらしういふことをすると考えている人は、い
つになつてもやれない。

自らやり得ると確信して行ふ人は、失敗する。

ただ一心に、こういうことをするのだと行動している人
は、体力が湧いてくる。

途中は省きますが、けっきょくは「生きている人間の裡の
力」を振作すること―その「裡の力」は「無限なるものに連
つて使つて減るといふことはない」といふのが野口さんの
「医学」の帰着点のようです。私はあの「エミール」や「告白」
を書いた時期のジャン・ジャック・ルソーが、ひどい持病の
尿道狭窄に苦しめられていたことを、この語録を讀んでいて
思い出しました。この「裡なる力」とは何でしょうか？「医
学」は人間の長い歴史の中で、人間が「人間自身」を考えた
知恵を中核にしています。―「文学」も、それをもつと幅
ひろく問題にしてきたわけでしょう。いまの教育はあまりに
お粗末で、「教育との出会い」がない子どもこそ、そうした
「教育との出会い」を内心希い求めていて日々失望し、「人間
でないもの」にされていつている、そういう感じが深まりま
す。

（おわり）



これは、みどり会研究会で行なわれた講演のまとめに、周郷先生ご自身が書き加えて下さったものです。久々の講演は非常に熱がこもり、伺う方も一生懸命でした。

この中でもふれられたモンテッソーリの教育について、周郷先生が『人間らしき進化のための教育』という訳書をお出しになりました。著者マリオ・M・モンテッソーリはマリヤ・モンテッソーリの孫にあたるオランダの精神医であり精神分析学者でもあります。そして編者ポール・リリヤード夫人は、アメリカのモンテッソーリ教育の権威です。とかくモンテッソーリ教育というと「教具」その他の方法が表に出て、見落とされていたような「モンテッソーリ教育の基本原理解」についてわかりやすく、くり返しのべられています。というのも、これは著者マリオがモンテッソーリ教育の実践者や父兄のために、各地で行なった講演をもとに編まれた本なのです。

周郷先生もあとがきでふれられています。モンテッソーリの「二つのいっそう革命的な見かた」すなわち「人間の人格形成において不可欠なものとしての教育の見かた」、もう一つ「人間と宇宙との関係（かかわりあい）」について」の章は、これが七十年前に唱えられていたとは驚くばかりです。現在の教育が「モンテッソーリの考えていた教育」とは大分はずれた方向に向かっているのではないかと……と考えさせられることのまことに多い本だと思います。

発行所 ナツメ社

(赤間峰子)

『復刻・幼児の教育』

『幼児の教育』一巻―二十巻までの復刻が完成しました。

「我国教育界の刻下の急務は、児童教育法の研究と、母としての婦人教育の普及にある」とうたい上げた創刊号を手にすると、当時の関係者たちの熱い息吹きが伝わってきます。

明治三十四年、保育界は、創設の混沌の中から、漸く、新しい方向をつかまえていたのです。

そして、巻を追うごとに、日本の保育の成長の道すがら明らかになってきます。それは、大正期へ向けて徐々に夢をふくらませ、やがて、「誘導保育」という形で華麗な花を開かせていくのです。

従来、この雑誌は完全な揃いがなく、閲覧の困難さが数かかれていましたが、この度、関心を抱く多くの人々の傍におかれるべきものと考え、復刻刊行に着手致しました。過去を問い、現在を考える手がかりとして、広く活用されることを願

っています。

全二〇巻、別巻一、A5判、クロス装、外函入 題字・東山

魁夷、別冊記念論集

〈一巻―二〇巻〉『婦人と子ども』明治三十四年―大正七年

『幼児教育』 大正八年―大正九年

編集委員 津守 真

本田 和子

堀合 文子

〔刊行〕名著刊行会 〔価格〕 現金価格 一八六、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 東京都千代田区神田神保町一―四七

大森ビル TEL 東京 (〇三) 二九五―〇一八六

本社 大阪市東区今橋二―二二 藤浪ビル

TEL 大阪 (〇六) 二二七―五三四一 (代)

『幼児の教育』復刻記念懸賞論文募集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方々が、優れた論文をおよそくださいますことを、期待しております。

〔記〕

一、復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。

一、応募期日 昭和五十五年九月末日まで

一、応募要領 ペン書き（またはボールペン）とし、四百字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上百枚以内。上表紙に「復刻記念懸賞論文」と朱書の

上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象

として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品 最優秀賞一名 賞金二十万円

二等賞 二名 五万円

三等賞 三名 一万円

参加賞 全員 記念品

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問合わせ及び応募先

〒112東京都文京区大塚二―一―一 お茶の水女子大学附属

幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

尚、電話での問合わせは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部

後援 株式会社コーディック

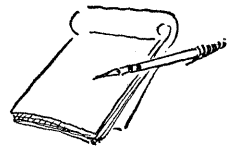
私の幼児教育論

一、幼児期をどう位置づけるか

私の専門は心理学である。しかし特に幼児を対象とするものではない。にもかかわらず、私は、大学で時に幼児心理学を講義させられたり、青年心理学までも講義させられたりもする。それで、時々自分自身、自分のほんとうの専門が何であったのか振り返ってみなければならぬことがある。

私の専門は、本来は、集団の中の対人関係であると思ってい

る。そして、私は、それを主に児童期の子どもたちについて研究してきた。それゆえ、時に私は自分自身を児童心理学が専門だと



田中裕次

思いたくなるときもある。

いうまでもなく、児童心理学は、児童期にある子どもたちを対象とする心理学である。すくなくとも、「児童」という以上、いわゆる小学校に在学している年齢の子どもたちについての心理学でなければならぬはずである。このことは幼児心理学でも、青年心理学でも同じである。

しかし、こうした別け方が問題になるのは、幼児期とは、児童期とは、青年期とは、というように、それぞれの発達時期がいつからいつまでと定めようとする時である。もともと人間の成長の上でそうした発達区分があったわけではない。これらの区分は、人間の成長の姿を記述する上で、いろいろと都合がよいというこ

とで考えられたのかもしれないが、それにしても、幼児期と児童期の境目がどこにあるのか、児童期はいつ終るのかというような問題になると、なかなかむずかしいことになってしまう。

発達段階の区分の問題はさておいたとして、では幼児を対象とさえしていれば幼児心理学といえるのであろうか。小学生を被験者とした研究をすれば、それだけで児童心理学なのであろうか。もしそうならば、心理学をまとも研究している者はすべて、発達段階のどこかに位置している人間を対象としているはずだから、そうした区分はあまり意味がなくなってしまうことになる。

人間の成長は本来連続的なものである。乳児期が終って幼児期がくる。幼児期の次には児童期が、といっても、毎日子どもと接している者にとっては、その区切りがいつなのかはわかるはずもない。まして子ども自身もそんなことを意識したりはしない。

私は幼児期にかぎらず、人間というものを、つねに成長の過程にあるものとしてとらえたいと思っている。それゆえ、私は発達段階のある区分に入る特定の者を対象とするのではなく、発達過程それ自体を研究対象とするということになるのである。私が、自分の専門を集団における対人関係においているのも、対人関係とか、集団というものが、白紙で生まれてきた赤ん坊が、人間と

して成長していく過程で、まさにその成長の本質にかかわっているからなのである。

ところで、こうした私の立場に立って幼児期というものを位置づけるならば、幼児期は単なる人間の成長過程の一時期であり、それは、ことさら特にとりあげて論ずる必要もなくなってしまうことなのである。

二、人間の成長過程で何がおきるか

よく、幼児期ほど重要な時期はないとか、幼児期の教育は特にむずかしいなどといわれる。しかし、人間の教育や成長過程で、むずかしくない時期はないし、重要でないというような時期があるはずもない。あるとすればそれは、いつもいつも神経を使い、緊張しつづけではくたびれてしまうので、すこし気を抜かせてほしいと思って期待する、親や教師の心理的反映なのかもしれない。

人生は成長そのものであり、その裏には、それを支える躍動する命があるのである。三十歳代ともなれば、もはや青年心理学の対象からも、いやおうなく見放されてしまうが、かといって、発達心理学の対象にもなり得ないというわけではないはずである。

最近、壮年期・向老期・老年期というようなことばも盛んに使われるようになってきた。人生には、それぞれの時期にそれぞれの意味がある。青年期のある時、いかにも自分が大人になったような気がするときがある。しかし、結婚して子どもを育てるようになる、はじめて、自分を育ててくれた親の苦勞がようやくわかるということにもなる。

また、四十歳もすぎで、中年ともなれば、そろそろ先の見えてきた自分の将来にあせりを感じたり、反対にひらきなおったりもする。これから成長していこうとする子どもたちを見て、「お父さんだって」と意気込んで見るものの「お父さんの苦勞はお前たちにわからないだろう」などとひがんでもみる。

向老期には向老期の体験があるだろうし、老年期には老年期の長い人生を歩んだ人にしかわからない実感というものはあるはずである。それを若い人たちに理解しろというのは所謂無理なことなのかもしれない。

しかし、ただ一つここで云えることは、そうした人生の節々でおこる体験も、それが、それなりの深い意味を持ちうるのは、それまでの歩みの積み重なりがあるからであるということである。そしてそれが、充実した歩みであればある程、その感慨もまたそれだけ深いものになるだろうと思えるのである。

三、親の生きがいと子どもの生きがい

私はかつて、この雑誌の第七十二巻第八号（昭和四十八年八月）に「子どもの生きがい」と題する小論を載せたことがある。そしてその中で、子どもの生きがいと親の生きがいは、同時に存在するはずのものだということを書いた。これは、子どもの生きがいは、はじめは、なんといいなくてもまず親によって与えられるものであるからで、親が子どもを生み育てることに一つの生きがいを感ずることができるとき、はじめて子どもも生きがいを感ずることができるようになるという意味であった。ここで「親」というのは、まさに子どもを育てる親のことであって一般の大人としての意味ではない。大人たちは、一人の人間としてそれなりの生きがいを持っていなければならないが、それが「親」という役割をも兼ねる時、そこに親としての生きがいも、また加わるわけである。

この「親」としての生きがいと、「一人の人間」としての生きがいは、本来一応別のものと考えることも敢えて必要なことであるのではなからうか。ともするとこの辺をいっしょにしてしまつて、親としての生きがいをそのまま人生の生きがいとしてしまつ

人々も多いようである。そういう人程、やがて子どもが成長して一人立ちしていくにしたがって厳しさを感じたり、あげくの果ては子どもに裏切られたといて嘆くはめに陥るのであろう。

一親である期間は人生のほんの一時期であるということが、最近の寿命の伸び率からわかった今、私たちは、よくよくこのことを肝に命じておかなければならない。しかし、このことは、逆にいえば、親子という間柄でいられる時期というものが、親と子に比べて大変貴重な時期であるということにもなる。そして、たかだか二十年に満たないその期間の中で、幼児期程、親と子が親密になれる期間もないということもまた認識されるのである。

子育てを人生の中で遭遇する一つの体験として位置づけ、それを積極的に受けとめるならば、そこに私たちは一つの貴重な人生のあり方を学ぶであろうし、自分の人生をそれだけ実り多いものにすることもできるはずであると思う。それはとりもなおさず、子どもを通して私たちが学ぶということであり、それこそ、子どもたちにとっても「生まれてきてよかった」と言わしめることになるのではなからうか。

四、幼児教育とは何か

幼児期というものが、長い人生の一時期にすぎず、また、その時期のみをとらえて云々するのでなく、人間の一生全体を見通して、その意義を考えなければならぬということを述べてきたわけであるが、ここでもう少し子どもの側に立ってこのことを考えてみよう。

いつだったか、NHKのルポ番組で、夏休みの学習塾に通う小学生たちのことが報道されたことがあった。その中で、「なぜ、夏休みも塾に行くの」という記者の質問に、ある子どもが「東大に入りたいたいから」と答えているのがあった。「どうして東大に入りたいの」と続いて聞いた質問に、その子は「いい会社に入って、いい生活をするためには、いまのうちにガンバッテおかなければならないから」と答えていた。私はこれを見ていて本当にびっくりした。子どもを叱咤激励する親の姿もさることながら、子どもの子どもらしからぬ悟りにも驚いたのである。

将来のためにそなえて今をガマンすることは、確かに人間にとって時には必要なことではあろう。しかし、今という時をそのために犠牲にすることは、やはり問題ではなからうか。私はつねづねこのような教育を「今に見ている教育」と呼んでいる。人生のある時期に、その時しか感ずることのできない充実感というものを無視しては、将来の喜びはあり得ないのではなからうか。よし

んばもし喜びというものがあつたとしても、それは他人とは違
う独自の努力という点で、さぞ孤独なものとなつてしまふのでは
なからか。そこには、他人と喜びを分か合ふというそれこそ人間
的な本当の生きがいはいは生まれなし、ただ「俺は苦勞したのだけ
ら、他人より良い生活をして当然だ」という一人よがりな満足
感しか残らないであらう。

これと似たことは幼児の教育に当つてもよくあると思われる。
幸い幼児は、その記憶を大人になるまでとどめないし、親に依存
して生活しなければならぬという点で、所謂親の考えに従わざ
るを得ないから、一見問題になりにくい面があるのだが、それだ
けに親や教師は、充分注意してやらなければならぬということ
にもなる。

私的な話で恐縮であるが、私の子どもがまだ保育園に行つてい
た頃、盛んにテレビマンガの主題歌を歌つていたことがある。私
は、その時子どもというものは、ほんとうによく覚えるものだ
と感心したのであるが、考えてみると彼の記憶の源は、ただ「耳」
であるということにあらためて気がついてびっくりしたものであ
る。私は、つねづね「文字などというものは学校へ行けば教えて
もらえるのだから、無理に今教える必要はない」と、ごく常識的
に考えていたのであるが、他方、文字を教えてやつたら、きつと

もつと便利だらうなども考えていたのである。

しかし、よくよく考えてみると、文字を知らないということ
が、かえつて彼の耳をきたえているのであつて、やがて文字にた
よつてものを憶える時がきたとき、耳にたよることはそれ程必要
なくなつてしまふということにも気づいたのである。耳をつか
つて聞きとる能力を養ふという時期は、彼にとつて今が最後の
である。この時期を逸しては、彼はその全能力をそそいで耳を働か
せる機会はないのである。心理学を専攻し、ときに幼児教育に口
ばしをはさみ、「学校に入るまで、文字は教える必要はありませ
ん」などともつともらしく言つていた私は、この時やつとその本
当の意味がわかつて、われながら恥かしい気持ちを感ずるととも
に、あらためて、その言葉に自信を持つたのである。

人生には、その段階々々でどうしてもやつておかなければなら
ないことがあるのである。その時期を逸しては二度とそのチャン
スはおとすれない。そういう時期というものがあるのである。そ
ういう見方で幼児期というものをとらえるとき、あらためて幼
児にとつてそれは重要な時期であるということが言えるのである。

五、親と教師の責任

まだ本当の意味での自己主張というものを知らない幼児子どもたちにとって、親や教師が、彼らにいったい何を保障してやるべきかを知ることが大切である。

最近しきりに早教育の問題がとりあげられている。従来のレディネス（準備性）理論に対して、積極的な働きかけの理論がその根拠であるが、ともするとそれが背のび教育になってしまふこともしばしばのようである。子どもは早くから刺激を与えて感覚をきたえてやれば、それだけ早く伸びるのだというわけで、いたずらに新しい刺激を与えて引き伸ばそうとするわけである。しかし、そうしたやり方がともすると、早く知識をつめこんですこしでも人より先んじさせようとする利己的な親の心と結びつくことは我々が最も警戒しなければならないことである。

たしかに子どもの感覚器官は、それを早く刺激してやることによって、より早くその機能を発揮するようになるであろうが、それだけまた早く卒業してしまうというものでもない。むしろ中途半端に卒業させてしまわないためにこそ早く開発して、それだけ長い期間充実した感覚能力を享受することこそがその主旨であるはずなのである。

幼い子どもたちが、あることがらに夢中になっているとき、それは必ず彼らが何らかの感覚器官をフルに発揮しているときであ

る。そして、それは彼らにとって最も充実した人生をすごしているときでもある。親や教師はそうした彼らの充実感を、さらに充実させてやる必要があるし、彼らが夢中になれるようなものをわが手で用意して与えてやらなければならないのである。

もちろん、われわれの社会には、それなりの秩序やルールもある。度を過ごして他人に迷惑をかけるようなことになることは良くないが、そういう失敗に至らないような場面や状況の設定や題材の選択こそ、幼児の教育指導に当る者の工夫のしどころといえないであらうか。

限られた時間と空間の中で、何かに没頭し、より密度の高い一時をすごすこと、それこそが人生の知恵というべきであろう。充実した親子の親密な関係、未熟でぎこちない仲間同士のつきあい。これらは、それがたとえほのぼのとした親しさにつつまれていようと、あるいは深刻な対立によるぶつかりあいであろうと、それが互いに真剣なものであるかぎり共感という心のつながりを生みだすきっかけになるものなのである。

幼い子どもたちの素直な真剣さを見るとき、私はいつも新鮮な感動にうたれるのである。そしてうらやましく思うのである。そして、あらためて、私は私の夢中になれるものを追求めようとするのである。

（信州大学）

石原キク先生

高橋 フミ

日本の幼稚園教育の草創期に、一生涯をこのひとつの事に献身しようと決心した十六歳の小娘が山口県の田舎に、名もなく小さく立てられたミッションの女学校の片隅にいました。

そして八十三歳五カ月の全生涯を東京のひとつの学校の中で若い日の夢を生き抜きました。その人、石原キク先生について私の知り得た限りのことを書くことにいたします。

先生の手記の中に次のような文があります。

「私の幼い頃、広島女子学院附属幼稚園に通っていた頃、美しい清らかなそしてやさしいゲインズ先生をこよなく尊く思われ、大きな憧れのまどであった。そのお話をきくことが何よりも嬉しかった。『大きくなったらあの先生のようになり

たい』と思っていた。豊浦女学校を卒業すると私はまっすぐに東京保姆伝習所に入学した。私の幼い頭の中に芽生えた希望は私の生涯を決したものと云える」

私をはじめ石原先生に会ったのは昭和三十四年の春、東北の田舎から高校を卒業したひとりの娘をつれて石原先生の学校に入れてもらうために訪ねた時です。先生は幼稚園の方で園児と共に律動をしておられるところでした。もう七十歳を越しておられる先生がピアノに合わせてひよいひよいと跳び上がる時は園児よりも幼な子のように見え、溪流にあそぶせきれいのように清らかでした。

私が連れてきた娘と面接を終った先生は別室で待っていた私のところに来て、いきなり「あの娘さんはほんとうに幼稚園の先生になりたいのですか」ときかれ、「あの顔ではこまりますね」と言われた。私はど肝を抜かれるような思いでした。無愛想な顔つきの東北娘であることを気にしてただけに。

しかし、入学を許されて、先ず、笑顔のできる人になる修練を受けました。先生永眠後、前掲の手記を読む機会が与えられて再び初対面の時の「あの顔では困りますね」の意味をしみじみかみしめました。

女学校を卒業したばかりの小娘石原キクを明治三十五年に

山口県から東京に、幼児教育の勉強をさせるために連れてきたのは恐らく当時の女学校に関係していた婦人宣教師たちでありましょう。東京築地にバプテスタの宣教師ミセス・タッピングが創設した保姆伝習所へ石原先生は入学したのです。

その時八名の学生がいたという記録が残っています。ミセス・タッピングは当初幼稚園を開設したのですが日本人教育者の養成の必要を感じて伝習所を併設したのです。この伝習所は大正六年になってから東京府の公認となり、現在の彰栄保育専門学校になったわけです。

石原先生はこの伝習所で、当時の米国でフレイベルの教育精神と方法を主軸とした教育と技術を身につけて来日した数名の婦人宣教師によって幼児教育に必要な学課目の教授と実際の訓練を二年間習得したあと、五年間の米国留学の機会が与えられました。東京都市紀要(昭四一・二・一五)には「石原さく女史が最初に保姆の伝習所を受けたのは四谷時代の彰栄幼稚園の伝習所で、ついで東京府教育会の講習を受けているがその仕上げは米国であった」と記されています。また「履歴書は日本の幼稚園史上をかざる好資料ともおもわれるので現存者であるがつきにのせることにした」と記されてあってその履歴書が全部記録されています。

米国留学の前一年間、石原先生はミセス・タッピングの家で家事の手伝いをしながら夫妻から生活指導を受けたのですが留学の道を開いたのもタッピング夫妻でした。

最初の一年はグランデンビルのデニソン大学で語学を習得し、翌年から二年間シンシナチ大学の保育師範学校で勉強して幼稚園教師の免許状を取得しました。続いて専攻科を一年とウェストン大学に移って一年の二年間、教育学、心理学、保育学を専攻しました。この専攻科の期間の学資は当時の大統領タフト氏の篤志によるもので、そのことについて石原先生は次のように書いています。

「卒業の日はタフト大統領からホワイトハウスに招かれ大統領自らスカラシップを与えられた。そして私に学業に精進すること、日米親善に寄与するよう一層励むようとの言葉を与えられた。私は身に泌みてこの言葉を聞いた」

当時のアメリカは幼稚園の創設期を終り発展期へはいろいろとしていた時代で、フレイベルの方式とその恩物が絶対視されている傍らデューイの教育思想やソーンダイクの精神衛生などが教育界に影響を与えつつありました。石原先生の積極的な研究心は強く刺激され更に大学に留って研究を続けたい願望を抱いていたのですが日本側の要請によって一たん帰国

することになりました。

明治四十三年八月に五年間の留学から帰った石原先生は、直ちに、首を長くして待っていた伝習所の宣教師たちを助けて学生の教育と学校運営に当たったのです。大正六年までの七年間、十名に満たない学生を愛し誠心誠意教育しながら一方に伝習所を学校らしい運営に導いて東京府の公認を得るに至らしめました。この年、石原先生は再度の米国学に発ちました。近い将来米国学教師に代ってこの学校の校長と併設幼稚園の園長の責任を執るための準備の留学です。

コロンビア大学教育大学保育学科に二年間留学して幼稚園監理者としての資格を得、更に大学院で一年間研究を深め、大正九年八月に帰国して翌十年四月から校長と園長の任に就き昭和四十三年十一月二十七日の永眠の日まで五十三年間の仕事一すじに働き抜かれました。

二度目の留学の時は米国では連邦教育局内に「幼稚園教育課」が設けられていた時代であり、イタリーからモンテッソリーが訪米、ワシントン市に「モンテッソリー教育協会」が結成された直後でありました。コロンビア大学ではデュイイやヒルが活躍していました。それで私は石原先生の学生時代のノートかレポートか或は日記でも見たく思っ探せる限り

探しましたが何ひとつ見つかることができませんでした。学生時代のレポートや卒業の時の論文などは米国の大学に残っているのでしょうか。帰国されてからの日記や先生の所に届く手紙類はほとんど英文であったことを記憶していますが、それらは全部、先生永眠後に先生の親友のひとりが焼却されたと間接にききました。前掲の手記は昭和三十八年七月十五日に「東京都表彰規則」によって教育功労者の推薦を受けた時に一式書類に添付した履歴書の説明程度の短かいものです。

大正十二年の卒業生のひとりが昨秋、この学校の八十周年に学生時代を回顧して書いたものの一部をここに引用いたします。

「私は石原先生御帰朝の翌年大正十年四月入学しましたので、先生の新進気鋭に満ちた最も新しい幼児教育の講義を二カ年にわたって充分吸収する事の出来た幸な学生でした。

この様な当時としては全く新しい幼児教育の講義を骨の髄まで浸み通る程に吸収させて頂いたのですから、私の生涯を通じて幼児教育の仕事にどれ位役立つかわ知れません。……フレイベルの恩物や「母の遊戯」の書を通して、教育法の原理と実技を学び、その深奥な幼児教育学に私はどんなに驚きと興味をもって接したかわ知れません。

又モンテッソリーの教育学も併せ学びました。両者に共通することは、幼児教育は大人の設定の枠の中で、詰め込んだり、教えこんだりする単に模倣させる教育ではなく、手、足、五管を使用することによって興味を生ぜしめ経験させることにより、幼児が自ら発見し創造してゆくように指導する開発的保育が真の人間教育であることを本当によく理解することができ、その理論と実技をみっちり教えて頂きました。この教育法は敗戦を契機として日本の教育、幼児教育にもアメリカの指導があったと聞きますが石原先生の教育法はそのまま日本の幼児教育界にあって何らの改訂を必要としなものであったと思います。

石原先生の律動は日本ではまだ珍らしいものでした。当時は幼稚園のお遊戯なるものは表情遊戯といって大人の作った振付動作を単に模倣して動くのですが、石原先生の律動は音楽を聞いて各自が自由に表現する創作リズムで个性的に独創的に表現するところに価値があることを痛感しておりまして……

二年生になりますと午前中は実習に出かけます。工場地帯、商業地域、上流階層の地域等、変わった環境にある幼稚園で、その地域の園児に接し、子供の扱い方を学びとりまし

た。又一週間に一度、主任の先生と一緒に家庭訪問をしました。お母様と親しく面接して、幼児教育の重要性、キリスト教教育について語り、お母さんの意見等も交換するものでした。

たしか火曜日でしたか、夜の集りがありました。家庭訪問の話、或は実習にこの問題等を語り石原先生は熱心に傾聴して学生によい助言を与えて下さいました。……」

このような回顧を今なお抱いている卒業生は少くありません。私はそういう人たちと会うたびに石原先生は教える立場に立ってからもあのひたむきな教えられ者の姿勢を崩さないうで持っておられた教育者であったこととその教え子への感化の大きさを思います。また通算八年間の米國留学の学資も生活費も多くの米國人の献金によって十分に満たされたことは先生の学習する態度と将来への使命感が滲み出ている生活態度に、まわりの人たちが常に感動し尊敬を抱いたのであるうと想像するのであります。当時ニューヨークのある教会の中に生れた「石原キクを支える会」というサークルは今も生きています。老齢の残存メンバーが時どき集まって石原先生を追憶しています。

石原先生はピアノ、オルガンはじめ教具の取り扱い方が正しくあること、丁寧であることを厳しく指導しました。また学生の服装と身体の清潔にやかましくそれは自分の健康管理の第一条件であるばかりでなく他人に対する礼儀であることよく言われました。一生涯を独身で貫き仕事一筋に打ちこんでいたのですが、食事は必ず自分の手料理、パンも焼きケーキも作りました。こういうことは若い日に宣教師の家庭で生活指導を受けたからでありましょう。しかし学生を指導する時の厳しさはビューリタンの窮屈さや固さはかりではなく、楽しさと広さを感じることが多かったように思います。一つの例としてもうひとりの卒業生の追憶の記を紹介しましょう。

「お芋が大好物の学生が、こっそり焼芋を食べながら受け持ちのピアノの空拭きの仕事をしていました。片手にお芋をもつて、乱雑な音をたてて拭いていた所に先生が扉をあけてのぞかれたのです。その人はまっ青になりましたが、先生は何もおっしゃらずに扉をしめて行ってしまいました。翌日先生はその学生を呼ばれました。私は『怖いから一緒に行つてあげやまってくれ』と頼まれて二人でおそろおそろお部屋にはいりました。見るとテーブルの上に焼芋が山盛りにして出しています。先生はニコニコして『あなたはお芋のおいしい所

の出身でしたね。私もフランスにいた時あの焼栗より日本の焼芋がずっと懐しかった記憶があります。私も大好きだから皆で頂きましょう』とおっしゃったのです」

石原先生は顔だちも美しかったので生涯を独身で通されたことについて或るとき私は、若い頃縁談も多かったでしょうに迷うことなくこの道一すじに突き進まれたのですか、という意味のことをきいたことがあります。その時の先生の答は「女性は家庭を持つことが一番大きい神と人への貢献である」ということと「好ましい男性からの求婚も幾度かあったがお祈りしていると神さまはあなたの全身全霊の力を用いて幼な子が神を知ることのできる教育の仕事をしなさいとお答えになる。これは神さまからの使命なのです」という意味のことを静かな声で呟くように、にこにこしてもっと詳しく話してきかせられた。

近代科学の目ざましい発達の中で心理学、生理学、教育学の発達も目ざましくして新しい実験、統計、学説、方法、思想などが次々と発表されている現在に一面の幸福を思いますが一方で、人生の大切なものを、それを手段や方法として考え

てはならないことを手段とし方法としてしか考えられない教育者が多く養成されていることを痛感していますが、石原先生は明治末期から大正にかけて米国で、当時の新しい科学、学問、教育思想などと取り組んで意欲的に通算八年間の大学生活をしたのですが、実際の場でそれらを生かし用いるとき、教育の方法と目的とが被教育者に向って、先生自身の意識の中ではっきりと区別されていたと私は見えています。例えば被教育者に対して「だめ」という言葉は禁句であると語る場合、方法として語られていることが多いことを感じるのですが、石原先生にとっては決してだめですという言葉は口から出てこない、それは人間にだめということはないという確信があつて心底から他人を尊敬し自分自身の人格を大切にしたかわりでありました。

また、さりげない会話の中で常に私が感じ取ったことは先生にとって仕事も勉強も生活の手段ではなく幼児に仕えるための自己修練であつたことです。「婦人はもつと科学的な知識を正確にもつていなくては幼な子に寄与できないよ」とか「幼児教育に必要な基礎の理論をお母さんたちにも確実に勉強してもらいたい、それはお母さんの生活に必要な基礎でもある」というような断片的な言葉が今、私の脳裡に蘇つてき

ます。こういう会話はいつもそこに幼な子が何人か遊んでいる場であつたことも思い出します。

石原先生が校長時代のこの学校には戦前にも戦後にも支那、台湾、韓国、タイ等から数名の留学生がきていて、寮生活をして所定の学課目を履習し、卒業してそれぞれの母国で幼児教育に尽しています。石原先生もまた永眠の少し前までの四十年間に数回外遊して教育施設を視察したり、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、中国等の代表的な教育者と交流したり、外国の教え子を慰問してその仕事を励ましたりしました。

石原キク先生は活字になる業績を残さなかったが「彰栄」——神の栄が彰われるために——と祈つた祈りと、先生の恩師ミセス・タッピングの祈り「教え子が幼な子を愛し給うたイエスを見るために」にまことにふさわしい見えない業績を私たちに残されたと思います。その業績は世界中で人知れず働いている多くの教え子の教育者魂となつて息をしています。

終りに、石原キク先生は昭和四十二年四月二十九日、永眠の七ヵ月前に、幼児教育多年の功勞によって勲五等瑞宝章を授与されたことを書き添えてこの稿を終ります。

(彰栄保育専門学校)

◇園長室の窓から◇

子ども本来の姿を求めて



岡田 鈴代

幼児教育は、「生活の教育化」が中心となるべきである。そのためには、幼児の内面から溢れでてくる経験や活動に、教育的なねらいをどのように調和させるべきか、また、その活動が更におもしろく楽しく発展していくようにするための手立ては、どうすればよいかを考えなくてはなりません。さらに、幼児が、常に停止することなく活動し、何かを考え、発見する姿を求めるためには、常に幼児の生活に応じたふさわしい環境の設定が必然的に要求されます。

しかし、それ以前に、私たちは、幼児らの活動にたいへんむらがあるのに気付かずにはいられません。朝食ぬきで空腹である幼

児、けいこごとのスケジュールが多すぎて疲労が残っている幼児など、家庭環境の欠陥によって、いつしか子どもらしさを失っている幼児がいます。それに加えて、登園のため送ってくる母親の中に、必ずといっていいほど、別れぎわに、「お利口さんになっているのよ」とつけ加えられて園に入る幼児、この利口にはいろいろの意味が含まれていて、びちびち遊びたくても遊びを禁止されてしまっているの、ある期間、傍観的にならざるを得ない状態が続くわけです。

こんな静かな田舎の幼稚園にまで、時代の風潮が流れて来ているのかと思うと怖い気持ちになります。そこで、入園早々に保育

参観を行ない、母親である責任と、母親としての喜びを感じる能力を見失っていないか、母性愛が涸渇していないかなどについて話し合います。そして、食事内容の大切さを再認識するために、サンプル弁当の交換会を開き、母の愛情ある食事を与えることにより、幼児は健康ばかりでなく、精神面、性格面までも健やかに育ち、人間関係の暖かみも味わうことができるという食事の価値を十分理解させるなど、まず、食足りて生き生きとした生活が生まれてくるのだということを知らせることから、幼児教育はスタートしなければならなくなりました。私たちは、このような現状から自然を大事にした肌と肌とのぶつかりあいによる教育を行なおうと考えました。

一、自然とのかかわりの中で育つもの

① 新しい発見のなかで喜び育つもの

先輩の先生方が、近くの山々から植えかえられたであろう小さな苗木が、三十年の年輪とともに茂みを増し、園庭の回りは、もみじ、松、ふじ、柿、ツツジ、桜などが四季折々に幼児たちを楽しませてくれます。そして、ここでの遊びでは、自然を友とし、図鑑の知識でない本物との出会い、自然との触れ合いが行なわれ

ます。

それでも、ゆっくりと幼児たちの遊びをみていますと、もっともっと幅広く、それらの自然を自分たちのものとして遊べないかと痛感するのです。園庭の片隈に小山があり、その回りは春になってやわらかい葉が一杯に広がっていても、そこにすわったり、素足で歩いたり、転がることすらできない幼児、「虫が背中にくからいや」「足が汚れるもの」とちゅうちょする幼児らには、目の前にある折角の自然も表面的に素通りしてしまうくらいがあると思われます。

雀のえんどうの笛つくりや、パイパイ草を口にくわえる遊びなどをしたり、教師も一緒になって転んだり、相撲をしたり、天気の良い日には、ピクニックとってお弁当の場所にするなどとしていくうちに、緑の香りも、草の青くさい味もすっかり知ることができ、いつの間にか木も草も園庭のすべてが、自分たちの遊び友だちとして広く活動しはじめるのです。

太い枝に飛びついてぶらさがりたい気持ちや、登ってみたいしぐさを見て、一番大きくて強そうな松の木に登ることを許可したその日から、靴や靴下をぬいで素足になり、木との感触に、「カサカサしている」「ぶらさがれる」と代わり合って楽しむ姿からは、はんと棒では味わえない喜びがあふれています。枝を折る

心配もなく、木の強さに幼児らは驚き、一度に登るとかわいそうだといたわりの気持ちが生まれ、たった一本の登れる木を大事にしているのです。また、新緑のはずのもみじが数本、秋でもないのに黄色くなって散りはじめたとき、根っ子のところに、カミキリ虫の幼虫がいることを知り、早速、調べるために根っ子を倒してみると、根っ子いっぱいのカミキリ虫の幼虫がいるのをみつけ、「この虫が木の汁を吸って生きていたのか」と一大発見に小さな頭が集中し、じっと見つめ、「どうして、どうして、どこから入ったの」の連発、とうとう林業試験場の人から話を聞くなど、今までは教師が見すごしていた幼児の一面があったことに気づくのです。

② 観察のなかで得られるもの

限られた土地での自然を生かすため、花壇に力を入れて、いろいろな花の美しさを肌で直接感じさせてやろうと思いたちました。幸い年少組は秋に植える球根の成長過程を観察することができるので、全員で花壇の土を入れ替え、枯草、鶏ふんもうめて土を肥やすことから始め、チューリップと水仙の球根を三百個余り植えました。開花の時期までの手入れを懸命にやり大輪の出揃った美しさを十分に楽しませました。

黄色い花が二個、三個も一本の軸に咲いている不思議な現象を

みて、「双子のチューリップ」といって喜んだり、花に顔を寄せ、「大きい花の中に顔が入りそう」といって、めしべおしべを発見して驚いたり、花卉が散りはじめると、ままごとの皿に、ごちそうにと早変わりするなど、幼児たちは体を埋めんばかりに花に接しました。また、花の回りを歌まじりで駆け回るなど現に幼児たちの目に咲きほこっているチューリップや水仙を、自分たち一人一人の大好きな花として、素直にその美しさに接してくれるのです。また、野菜園は、いちご、トマト、さつまいもなどと屋外環境は年間を通して変化をしていきます。

園庭の木々が緑濃くなる頃には、幼児たちの大好きな虫取りが始まり本能的にタモを持って走り回ります。捕えた後をどうするかということは、捕えるのに夢中でそこまで気が回りませんが、カミキリ虫、セミ類、クロアゲハなどの蝶類の時期から、バッタ類の仲間の頃まで、捕えたらその日の夕方までに放してやることを約束して一匹でも死なせないようにします。

カブト虫などの甲虫類は、山の方からこられる先生に持ってきてもらって、幼虫から脱皮するまでを観察させて十分に虫のかわりを持たせるのです。生き物との心の交流が知らず知らずになされているのか、十分に虫と遊んだためか、消極的な無口な幼児が心を開いて虫に話しかける場面に会合うのです。

また、自分と同一化している四歳児は、カメの背中を石けんで洗いながら、「きれいにしてあげるの」と撫ぜたり、「先生、カエル食べたらとべるようになるの」と真剣な眼差しできくなど、自分と一体となって心情を満たしています。

このように一つの行動に真剣に取り組んだ時には、いつとはなく同一の遊びをしている友だちとの仲間意識ができ、そこには、会話があり、笑いがあり、驚きがあり、その中で知的な思考力が芽生えていくこともしばしばみられます。このように、どんな小さなことでも感動的な体験の一つ一つを大切に積み上げていき、人間関係の深まりをより濃くしていきたいものだと思います。

二、肌と肌とのぶつかりの中で育つもの

① 集団行動の中で

じりじりと照りつけた夏の太陽が沈みかけた頃よりユカカタ姿で集まってくる幼児たち、私たちはいつもと違った姿に目を細めて園庭に迎え入れました。親子全員で行なう納涼大会、父兄たちの手で一か月前から用意された檜、金魚すくい、氷かきなど数店が並び、太鼓の音が響きわたる盛り上がりしました。

連帯意識が育ち、今までは、自分の子どものことだけこそ考え

なかった父兄も、みんなの協力がなければできない一つの大きな行事に取り組んで、親も子も職員もそれぞれの自分の持ち前をフルに出し切って協力する態度が生まれました。そして、幼稚園中が一体となって、今宵楽しく体験したことが後々まで残り、人と人との交流を図ることができ、近隣愛の深まりがみられました。ある日の午後急に雨が降り出して来たとき、近所の子ども全員のかさを自転車につけて、にわか雨の中を走ってきて、各組の前で、「○○さんかさやに」とくばっている園児のおじいさんの姿をみて、自分本位の世の中ではめずらしいうれしい姿だと胸がしまったことがあります。

② 劇あそびの場面

毎月行なう誕生会に年間三回は全職員で劇やリズム表現を披露するので、昨年の二期の後半の時に、「七匹の子羊」の劇あそびを演じました。ストーリーが進むにつれて、狼が子羊を食べるシーンはかわいそうといいながらも、おもしろおかしく見ていましたのに、子羊を狼のおなかから出して、石ころを詰める場面から、幼児の目は狼に集中し、池に落ちる狼をみて、狼になった担任の幼児が、「早く助けないと狼が死んじゃう」「早く早く」と叫ぶのです。「どうして助けるの」と問いかけると、「ロープをなげて引っばるの」といったかと思うと、その組の幼児が先頭に

なつて、ヨイシヨイシと力いっぱい引っぱり上げました。自分たちから立ち上がつて、狼でない大切な先生を助けたい一心に変わり、空想と現実とが交差しながら、担任に対するやさしい心情が身についているのを思い知らされました。

平素からの教師对幼儿、对幼儿对幼儿のふれ合いの中で自然に育つ何物にも勝るものを痛感しました。

③ S児とのかかわりの中で

一年保育の二学期のこと、「S君、お菓子が食べたいと思つても、お菓子ということも食べたいということもしゃべれないの、それで、あーもうーといつてゐるの、どう思う」という教師の働きかけに、「かわいそう、なんにもいえなかつたら自分のしたいこともできへんに」といろいろと思ひやりの言葉が返つてきました。以前は、「やかましい、あーあー」といつて、迷惑がついてた幼児たちも、S児が徐々にではあるが自分でする姿をみて、「あ、自分でかばん掛けた」といつて頭をなでたり、「弁当を一人で保温器に入れた、かしこい」とよい面をみとめるようにもなりました。

ある時は、グループ単位の体育活動の取り組みの中で、S児についての話し合いの時に、達成可能なことを皆で考えてやるなど、S児に対してどうしてやればよいかをみんな考えてやつた

り、その時その時でS児自身がやれることはやらせ、不可能なことは世話をしたり助けたりする幼児などもみられました。

このように、友だちに対する思ひやりの心が育つまでには、幼児对幼儿の体当たりの争いや葛藤をいろいろの場面で経験していきます。その積み重ねの中で、友だちを大切にすることの理解も、グループで遊ぶおもしろさもみつけ出して来たように思われます。

そして、組全体、園全体がS児にそれとなくことばをかけたりに思われず、

S児は、幼稚園生活の後半からは、園外保育にも参加できるようになりました。他の幼児とあまり変わることもなく、山を滑べり、根っ子を引っぱつて登るといつた冒険にいとむ積極的な活動や、全身で山土にいとむ姿が見られるようになり、どこに障害があるのかしらと思われる場面にも数々出会いました。

④ 四歳児に接して

このように、部分的にはあるが、園全体の年間の流れを反省してみる時、失敗の連続でひや汗の流れる思ひやら、幾度となく心地よく想い出される場面や、つらかった場面などが交差ししてくるのですが、中でも二年保育の良さが痛感されます。あせらず、

その子その子に応じた配慮をすることにより何かをみつげ出すことができるのです。自己主張の強い四歳児、幼児一人一人に対することばかけを重視し、常にほほえみと慈愛の気持ちで接する時、かれらは安定感をもって自分の遊びに没入している姿をみる事ができます。そこには、獨創性に富んだ楽しい作品が生まれて感嘆したり、リズム表現の素晴らしさに共につられて仲間入りをします。ある時は、舟の船長にさせられたり、小人といも虫のお母さんになって、背中に大勢おぶさって来たりなど、すっかり幼児たちのとり子になってふらふらになる時もあります。

今まで、何となく小さく見られていた年少児も年長組になった喜びが日常の活動の中でプラスとなって現れ、時々年少組の保育室をのぞいては、やさしい思いやりのことばをかけたたり、一緒に遊んだり、ある時は、自分たちでグループをつくりルールある遊びを連日展開して満足している姿がみられました。昨年度年長児が二学期頃していた開戦ドンを、全く同じ遊び場所に進級早々の五歳児がして遊んでいる姿をみてほんとうにうれしくなりました。また体力の弱さから自信の持てなかったK児がトランポリンの面白さを覚え、ある限界を克服した時、友だちとの会話に大きな声が出せたり、笑いがみられるなど、それぞれに成長の姿がみられるのです。また、年長組になった親が、積極的にPTAの委

員を引受けてくれたり、いろいろと自主的な協力態度がみられると、二年保育のよさを素直に感じさせられます。

三、おわりに

しかし、すべての幼児に常に満足感を与え自らの力を十分発揮させることができたろうか、心と心のつながりが持てたろうか、単なる思いつきで軽卒な教育はしなかっただろうか、知的なことばかり幼児に強いことはなかったかしらと、反省と苦悩の連続です。

自己充実のできる環境——考えれば考えるほど本来に難しいことです。自分につまずきを感じた時には、倉橋惣三著の「保育の真諦」に目を通して心の安らぎを覚えたり、指導書を読むことにより自分への示唆を求めるのです。そして、職員のチームワークをかため、父母たちとも連帯感を深めつつ幼児たちに自己を十分に発揮できる場を与え、幼児の理解の上にならって、自ら何かをやるうといった意欲を育て、自主的に行動する姿を大切にした幼稚園教育を行なっていきたいものです。

(四日市市立伯山幼稚園)

—
◇わき見のすすめ

「その一瞬、ちょっとのわき見が地獄行き」

わき見のすすめというテーマをいただいて一番はじめに心にかんだことばです。

それはK町の高速道路の陸橋にいつの頃からか記されて、車の運転には縁のない私も何度かその道を往復するうちに心にとどめられたものと思われまます。

ドライバーにとって「わき見」は「飲酒」と並んで「地獄行き」の片道切符だといわれます。ですから、どんな理由があるにせよ、私たちは、「わき見のすすめ」すなわち地獄行きの片道切符販売の助け手としての役割を担うわけ

松隈玲子◇
—

にはいきません。

このように、人間の生活の中には、「わき見」をしてはならないものがあります。しかし、「わき見を許される」あるいは「わき見をすすめてもよいと思われる」ものもたくさんあるように思います。

その例を子育てにとってみましよう。

最近の教育の風潮は、充実した幼児時代をすごして小学生へというようにゆとりとゆたかさをもって下から上につみ上げるのではなく、一流企業に入るならこの大学へそのためにはこの高校へというように上から下へくりさがり、

まだ十分にレディネスのととのっていない子どもたちを手を伸ばしてすくい上げるといふ現状にあるといわれます。

したがってエスカレーターの一段目に足をかけた子どもたちは、わき見をするひまもなく、各階の所要所に配置された親や教師の目を意識しながら最上階へのほりつめる、短時間に無駄のない行程が準備され、そのプロセスにおける、子ども自身のわき見やより道を通して得られる楽しい経験や活動との出会いは素通りしてしまいます。

幼児教育はプロセスの教育であり、きめられた路線の上を、子どもたちをのせて、最も短時間に最終目標にむかってつばしる汽車であってはなりません。

こう考えながらも、私たちの日常をかえりみると、ことばや態度で「わき見をしないで」「ぐずぐずしないで」とせきたてる親と子の、保育者と子どものかかわりあいの多さに気がきます。

「ごままでおいで、ママにおいで」、這い這いをはじめたYちゃんのお母さんは、一生懸命に両手を広げたり、哺乳びんのミルクをふったりしてYちゃんに働きかけています。はじめは、よだれをたらしながら、顔一ぱいの口をあけてお母さんの所に這ってきたYちゃんも二度、三度と

「おいで、おいで」が重なる、目標物が欲求をそそる対象でなくなったのか、なかなかお母さんの呼びかけに応じようとしなくなり、そのうちに、途中で哺乳びん洗いの赤いブラシや、お姉ちゃんが置き忘れたゴムまりめざして方向転換をするようになりました。

「いやねえ、この子は、もう道草を覚えるんだから、わき見しちゃダメ、メエよ！」

お母さんはYちゃんの目にふれるものを片ばしから高い棚の上のせ「もうなんにもないない、さあママにおいで」をくり返しはじめました。単調な這い這い訓練にあきてむずかり出したYちゃんはどうとうお母さんにお尻をパチンとぶたれて泣き出してしまいました。

お母さんはがっかり、ため息をついてつぶやきました。「充分這わせてから立たせないといけないって先生がおっしゃったでしょ、だからわたし一生懸命やっているのに」

私は、Yちゃんのお母さんのなげきを笑うことができませんでした。

充分這わせるといふことは、人や物に対する赤ちゃん自身の興味や関心を育てること、興味のある人や物とのかか

わりをもちながら活動することと無関係であってはなりません。(勿論赤ちゃんに危険なもの、さわっては困るものを取りのぞいておくことは言うまでもないことですが)冷静に考えるところに思いが及ぶのですが、母親と子どもとの二者関係の中では、年齢やケースは異なっても、しばしばこれと同じように、短絡的に大人が設定した目標にむかってすすませようとしがちです。

「わき見」は子どもにとっても、おとなにとっても、時

☆わき見について

として必要なことではないでしょうか。

「わき見のすすめ」を私は、心理学でいう欲求不満からの逃避と同義ではなく、「思いつめ、考えあぐんで一つのことしか見えなくなっている心、動かなくなっているお互いの関係に気付き、見つめている対象からふと目をはなして他の世界を見ることによって、自分自身を変化させること」として考えたいと思います。

(西南女学院短期大学)

田 中 平 八 ☆

「わき見の勧め」を書くように求められた。ということ
は、私は、日頃わき見ばかりしているのだろうか。

一体、わき見人間とは、どのようなタイプを指すのだろうか。私なりに想像してみると、本来の仕事や勉強は適当に

しておいて、直接には関係のない行き事のあれこれに気を奪われている。さりとて、それに熱中するわけでもないといった生き方をしているひと。こうした人間を想定すれば……なるほど、私はよく当てはまる。

では、外から見るとどう映るのだろう。ほら、皆さんの回りにもいるでしょう。何かが故障したり、不調になると、どれどれと覗き込んだりしているうちに、直つて（直して、ではない）しまうひと。くいもの屋の情報とか、動物の名前とか、雑駁な知識の持ち主、このひと達は、おそらく、わき見の成果の一端を見せているのだと思う。でも、それだけのことで、本業には役立たないところが、わき見のわき見たる所以であろう。

内側から見た特徴はというと、話は跳ぶけれども、地下鉄の車両はどこから入れるかという話で、人気者になった漫才師をご存知のことと思う。初めて聞いたとき（あの二人、急に脚光を浴びるようになったが、ずっと前からやっていたのです）、同じようなことを考えているひとがいるものだなと、とても可笑しく感じたことを憶えている。例えばああいったどうでもいいようなところに、疑問をみつ、け、こだわり続けてしまうところに、わき見人間の病巣が

あるように思われてならない。

わき見をひとに勧めるという発想がよく理解できないとぼやいていたら、傍にいた妻が解釈してみてくれた。道を歩いていけば、と何やらロマンチックなたとえ、道の端に名もしれぬ花が咲いていることもあろうし、見上げれば雲が浮んでいることもあるでしょう。目標に向かって真直ぐに進んでいるだけでは、気付かずに過ぎてしまう。それよりも、ひっそりと咲く花々を愛で、浮雲の行方を眺める、ゆとりのある生き方をしたいではないか。

理想としてはそうだが、現実はもっと敵しいのだ、これは私。で、以下は強引に自分に引き寄せての私の反論。それはその時々で楽しいには違いないけれども、雑多な本やら器具やらで、部屋の貴重な空間は埋ってしまうし、金銭的出費だって馬鹿にならない。昔、戯れに本棚一段の本（チャーリー・ブラウンのシリーズだったか）の値段を集計してみたことがある。更に、よせばよいのに、その合計に棚数を掛けてみたら、ため息が出るような金額になった。もっと言えば、机の引き出しや物影に散在している、中途半端にしか利用されなかった器具・用具を見るにつ

け、自分の意志の薄弱さ加減に愛想の尽きる思いである。なにしろ、百ページの本を九五ページまで読んで、そのまま放置するという行為が必ずしもまれではないのだ。無理をしないといえば聞こえがよいが、もう少し克己心を持つべきではなからうか。

ここで私は自分の恥をお話ししたいわけではない。わき見人間にとって、わき見は決して余裕の現れなどではないことを主張しているのである。それに、わき見をするかどうかは、パーソナリティのかなり本質的な部分に関係している、おいそれとは変えられないかとも思うのだが。

親しい友人のひとりに、本物の「まっすぐ人間」がいる。学生時代、偶然、別の友人と私が同時に山本周五郎を読んでいた。「まっすぐ」な方の友人、普段は余り小説など読まない男なのだが、私達の影響を受けたのか、たまたま読んだ周五郎の世界が気に入ったものか、猛烈に読み始めた。精力的な古本屋回りをしているらしく、遊びに行く度に、確実に、新潮社の全集が増えている。そして、あるとき、俺、周五郎の小説を全部読んだ、といった。まっすぐ人間のわき見は、これまたどこまでもまっすぐらであるよらだ。

隣の芝生は青く、隣の柿は赤い。とかく、自分に欠けるものはよくみえるのかもしれない。私には、「わき見の勧め」という発想がそんなところから出ているような気がしてならない。違いますか。

ひとつことに打ち込んで、一定の境地に到達する。私の憧れる生き方である。お互い、無いものねだりというところでしょうか。

話に話ると妻が登場するようで恐縮だが、ここまでを読んだ妻は、わき見と本業の関係はどうなっているのかと言った。私を見ていると、どれが本業で、どれがわき見なのか、わからなくなることがあるそう。馬鹿なことを言ってもらっては困る。お金を貰ってくるのが本業で、お金が出ていくのがわき見です。

妻が皮肉っぽいことを言うのもわかる。しかし、本人にしてみれば、あれもしなければ、これもやりかけた、いつも不安感に怯えながら、ついまた、わき見に手を伸ばしてしまおうというのが本当のところなのである。まるで中毒患者のようなもの。

実は、申し訳ないことに、原稿のメ切日を既に超過して

いるのです。私は、前から江戸時代の浪人よろしく楊子を作ってみたくてしようがなかった。近く引越をするので、それに備えて切り詰められた山椒の枝が沢山落ちている。結局、原稿は進まないで、庭へ降り、肥後の守を使って削ってみたりする。形良く先端を尖らすのが難しい。私は口唇期に固着があるというのか、何か口にくわえているの

○わきみのすすめ

「わきみをする………」というときは、「とんでもない」「いけないことだ」とか意味づけて、「という結論がすぐに出てしまうことだしょう。この題名についても、「すすめ」というところが殊更にくっついていいることからしても、概念

が好きである。比較的形良くできた一本を噛みながら、部屋に戻って、原稿の続きを考えていたら、何やら口の中が痺れてきた。切り立ての山椒の木は楊子には使えないようだ。そういえば、初めてタバスコをレストランで見たと、味見してみようと掌に振り出してなめてみたことがあった。あれはもの凄いいものであった。(東京都立大学)

村田修子○

的には好ましくないもの。と定義づけられていることを感じます。

それが表面きって、わきみをすることをすすめる、という題を頂いて、その立場に立って考えてみますと、「とん

でもない」といわれる狭義のわきみではなく、視野を広く、ということを指す意味もあると思いますので、それらに属する経験を幾つか上げてみようとします。

娘が幼児だったずっと以前のことですが、入園して丁度私の隣のへやになりました。最初の一ヶ月位の間は彼女は張り切って登園し、クラスに入ると親のことなどすっかり忘れたように夢中になって遊んでいましたし、時に顔を合わせても知らん顔をしていて、すっかり園児になり切っていました。それは親として娘のことに気を使わなくてもよい状態でしたから、ちょっぴり拍子抜けしたような思いをしながらも、他の子どものことに専念することができ、都合のよい日々をおくることができました。

何の抵抗もなく集団生活の中に入りましたので、そのまますらすらといくこととばかり思っていた予想を裏切って、突然自分のクラスから抜け出してきて私にくっついていたり、だかさろうとしたり、離そうとするとき叫んだりするようになりました。

その状態は、まだなれない他の子どもたちに気を配らなければならぬ私にとって困ったことには違いなかったのですけれども、考えてみますと、入園したては何もかも新

らしいことばかりが目の前にあるために夢中になれていたのが、その一つの課題をおえて、やや気分的に落ち着いて、自分のまわりをながめる余裕ができてきたときだったのでしょう。みると、いつもは自分の相手をしてくれたり、甘える対象である母親の回りに同じような年齢の子どもが多勢いるし、母親はそれに手をかしているのです。それはとても許せないことだったので。

娘はいろいろ手をかえて自分の方へ注意をひきつけようとしたのです。でも朝自分のへやへ入るのは普通にできていましたから、そのあとはなるべく顔を合わせないようにしましたが、私は、困ったと思いつながら反面、子ども本来の姿を見出してはっとしたのも事実です。

これは間もなく友だちができて、その遊びが楽しくなるようにになりました。

娘はそのごねた時点で、わきみができるようになったのです。これはすばらしい進歩です。わきみをすることは経験し、学んでいるときなのだ、といえると思うのです。

それをひしひしと感ずるのは、その次の世代の一歳と二歳の子と一緒に散歩をしたり買物にいくときの二人の「わ

きみ」なのです。

蟻の巣のあるところは覚えていて必ず立ち寄って蟻の動きに声をあげたり、指さしたり、時にはふみつけてしまったり、しゃがみ込んで暫らくは離れないのです。それは行きにも帰りにもきまってる場所にすればやれるのです。そして本を開いたときに蟻が書かれていようものなら、「ありしゃん」とか「ちいち」と屋外を指さして自分の知っている蟻の存在を思い出す様子をするのです。

このわきみはすばらしいことだと思えますが、本音、このおつきあいには忍耐が必要なことはたしかですから、さまざまな現在の環境の中で生活している現在の母親たちの問題として、「わきみ」を十分にさせないことがあげられるのではないのでしょうか。

大人でも、廊下で会ったとき普通に挨拶するときと、会ったことに気がつかない様子のある人がいます。心が平穏なときと、何かに心を奪われているときとは全然

態度が違うのです。夢中になれることはすばらしいことに違いないにしても、一般社会に生活するための基本的・常識的なことまで実行できないほど、わきみをせずにつき進んでいく余裕のなさは、私にはどうしても不可思議なこととしか思えません。

●始めて顔を合わせたのに挨拶もせず、自分の用件だけを言って帰って行く母親

●教師の状態を判断することなく、自分のことばかり言う母親

自分も子どもを持っている母親とは思えない無神経とも思える様々な経験をして、こういうように育ってしまった人たちをどうしたらいいのだろう、このへんを何とかしなければ子どもへの影響も大きいだけけれど、と愚痴ったり、悩んだり、腹をたてたりすることの多い昨今なのです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考(その十二)——

海老沢 敏

九、ルソーの夢変奏

前章で明らかにしたように、《ルソーの夢》は、讚美歌として全世界に広まり、神を讚える旋律として親しまれて今日にいたりており、そうしたかたちではやくも一世紀半もの長い生命を保ちつづけている。だが、《ルソーの夢》がひろく歌いつがれていったのは、ただひとえに讚美歌の世界に特有の現象なのではなかった。この章では、《ルソーの夢》がくりひろげていった多様な変奏に耳を傾けてみることにしよう。

第二章で、数年前におこなわれた《むすんでひらいて》をめぐる論議について触れたが、小林善彦氏のエッセイの中に、この旋律がさる英語の歌の本の中で《Days of Absence》なる題で見出される旨の情報が得られたことが記されているのを紹介した。小林氏が指摘されているのは、故宮沢俊義氏所蔵の蔵書中に、氏の母堂が東京女子師範学校に在校されておられたころ求められたと思われる英語歌曲集があり、その中に《むすんでひらいて》のメロディーが《不在の日に》なるタイトルで掲載され、しかも作者の欄には《Rousseau, 1775; Rousseau's Dream》とうたわれているという宮沢教授の教示であった。

この英語歌曲集は、表紙や扉がとれてしまっているため、発行年は不明であるが、へたぶん明治二十年以前に日本に輸入されたものであらうと考えられる。ここで問題となるのは《不在の日々》なる歌曲である。

ボストンのゴットリーブ・グラウプナーなる音楽出版部が刊行した歌曲のピース物、いわゆる《シート・ミュージック》《ヘソング・シート》に《不在 Absence》なる作品がある。そのタイトル表示を書き出せば、以下のとおりである。

《不在》 歌詞は流行歌曲《ルソーの夢》に合わせて。ボストン、フランクリン・ストリート六番地、G・グラウプナー刊（注1）
（譜例1・次頁参照）

（注1）《Absence/The words/Adapted to the favorite Air of /Rousseau's Dream/Boston: Published by G. GRAUPNER, No. 6, Franklin St.》

ゴットリーブ・グラウプナーといえは、一七九六年から一八三五年にかけて出版活動をおこなったボストンの初期における重要な音楽出版者のひとりである。この《ヘソング・シート》がいつごろ出版されたものかは確認できないが、諸般の事情をかえりみると（注2）、一八二〇年代初めから一八三〇年代前半と推定される。

（注2） D.W. Krummel(Compiled by)《Guide for Dating Early

Published Music. A Manual of Bibliographical Practices》

(New Jersey, 1974.) この書物の二三〇ページ、二三三ページ、および二九ページ参照。二三九ページ所載のグラウプ

ナー刊の《ヘソング・シート》は一八二二年と推定されているが、これとおよそ同時期のものと考えられよう。

この《不在》なる歌曲は、《アンダンテ》とテンポこそちがった指示をもっているが、へ長調、二分の二拍子の四小節のピアノの前奏こそ、クラマーの《ルソーの夢》の主題の前半をほとんどまったくそのまま再現しており、かつ、続く歌曲の主部も、おなじようにクラマーの主題をそのままになぞって歌われるのである。主題の前半は別の歌詞をとまなづてくりかえし歌われ、主題の後半はその後楽節がすでに主題前半のくりかえしであるだけに一回歌われるのみである点はいうまでもない。音楽的な観点からすれば、この歌曲は、クラマーの変奏主題をそのままに歌曲に転用したという点で、第八章冒頭で述べた讚美歌としての《ルソーの夢》の最初の形、すなわちウォーカーの曲集の第二六五曲と同じ特徴を共有しているのだ。そうした点でも、この《不在》が、クラマーの原曲の成立年である一八二二年からさほど時間的な距離を置いていない。一八二〇年ごろに立ち現われたも

▼譜 例 1

A B S E N C E ,

THE WORDS

Adapted to the favorite Air of

MONSIEUR'S JOKE.

BOSTON: Published by G. GRAFNER, No 6 Franklin St

ANDANTE.

Days of Absence, sad and dreary, Cloth'd in sorrow; dark ar - - rays,

Days of absence, I am weary, Her I love is far a - - way.

Hours of bliss, too quickly vanish'd, When will aught like you re - - turn;

When the heavy sigh be banish'd When this bosom cease to mourn

2

Not till that loved voice can greet me,
Which so oft has charmed mine ear;
Not till those sweet eyes can meet me,
Telling that I still am dear.
Days of absence then will vanish,
Joy will all my pangs repay;
Soon my bosom's idol vanish
Gloom, but felt when she's away.

3

All my love is turned to sadness,
Absence pays the tender vow,
Hopes that filled the heart with gladness
Memory turns to anguish now,
Love may yet return to greet me,
Hope may take the place of pain,
Antoinette with kisses meet me,
Breathing love and peace again.

Sold for G.G. by John. Ashton, No 197 Washington St

YARVARD COLLEGE LIBRARY
FROM
THE BEQUEST OF
EVERT JANSEN WENDELL
1918

のと推定してもあながち不当ではあるまい。

ところで、この《不在》の歌詞を見てみよう。三節からなるテキストの第一節は次のように歌われていく。

悲しくもわびしい不在の日々は

哀惜の暗い装いに包まれ、

不在の日々に、私は疲れ、

いとしいひとは遠くに去った。

しあわせの時はあまりに疾く消え果て、

君はいったいいつ戻ってくるのだろうか。

いつ重苦しい吐息をつくこともなくなり、

いつこの胸は嘆きを罷めるのか。

これこそ、ほかならぬ《不在の日々》である。この歌詞が《流行歌曲》《ルソーの夢》に合わせて《歌われ、こうした恋歌として》人口に膾炙していったことは、小林氏の紹介されたように、《英語の歌の本》のかたちで《明治二十年以前に》も、日本に輸入され、女学校などでも歌われたらしいことから推察されよう。そればかりではない。前章で論じた讚美歌としての《ルソーの夢》の由来を語っている文献の中にも、「此譜は素と千七百五十二年

頃楽劇の爲めに作られたものであって、『淋しく悲しき不在の日や』という恋歌である」と、あたかもルソーの原曲であるかのようであるが紹介されていたのである。

この《不在》の歌詞は、私たちにあの《メリッサ》なる英語歌曲のそれをただちに思い出させてくれる。《メリッサ》の歌詞は、しかし、二節に亘って、ひたすらに恋人の不在を嘆くのみであったのに対して、《不在》の方は、第二節と第三節においては、恋人の不在を嘆くことから、その恋人がふたたび自分の許に立ち還ってきてくれる日のことを憧れをもって歌うという発展、展開を見せているのである。

ちなみにこの《不在》をルソーの原曲として捉えている海老沢亮編著《讚美歌歴史》は、そこから《ルソーの夢》が《多年の後》にみちびきだされ、知られるに至ったと、事実とは逆の説明をおこなっているものである。

《ルソーの夢》は、このように十九世紀の英語圏の世界で、《恋歌》として、世俗歌曲の分野でもはやされただけではなかった。すでに第五章で紹介したように、《グロウヴ音楽辞典》の第五版の《ルソーの夢》の項目の最後には、次のように記述されていた。「この曲はまた、以下の歌詞（これは譜例のリズムをわずかに変えている）がついた子供の歌としても知られている。《お

▼譜 例 2

CRADLE HYMN.

"GREENVILLE."
ROUSSEAU. DR. WATTS.

1. Hush, my babe, lie still and slum - ber, Ho - ly an - gels guard thy bed.
2. Soft and ea - sy is thy cra - dle, Coarse and hard thy Sa - viour lay:
3. Hush, my child, I did not chide thee, Though my song may seem so hard:

Heav'n - ly blessings with - out num - ber, Gent - ly fall - ing on thy head,
When His birthplace was a sta - ble And his soft - est bed was hay,
'Tis thy moth - er sits be - side thee, And her arms shall be thy guard,

How much bet - ter thou'rt at - tend - ed, Than the Son of God could be;
Ohi, to tell the won - drous sto - ry, How his foes a - bus'd their King;
May'st thou learn to know and fear Him, Love and serve Him all thy days;

When from heav - en He de - scend - ed, And be - came a child like thee.
How they killed the Lord of glo - ry, Makes me an - gry while I sing.
Then to dwell for - ev - er near Him, Tell his love and sing His praise.

やすみ、私の幼な子よ、お嬢さんのようにおやすみ／牝牛が戻ってきたら、ミルクがもらえるよ」

この記述から、《ルソーの夢》が《子守歌》、あるいはこの説明から明らかのように、《子守歌》としても知られていたことが分かるのである。こうした子守歌としての《ルソーの夢》については、典型的な実例をひとつだけ挙げておくことにしよう。一八八一年にニュー・ヨークで刊行された歌曲集に《フランクリン・スクエア歌曲集》(註③)なる曲集がある。J・P・マッカスキーなる人物が選曲編集した一六〇ページの歌曲集であるが、その二十二ページには《ララバイ》、すなわち《子守歌》あるいは《眠り歌》の代表例として、ほかならぬこの《ルソーの夢》が収められているのである(譜例②)

(註③) J.P. McCaskey (Selected by) 《Franklin Square Song Collection. Songs and Hymns for Schools and Homes, Nursery and Ahsidae》(New York, Harper & Brothers, Franklin Square, 1881.)なお、この曲集については、日本におけるルソーの夢の伝播について触れる後章で、ふたたび話題となるはずである。

この《フランクリン・スクエア歌曲集》に収録された《ルソーの夢》は《揺り籠讚美歌》と名づけられており、《グリーンウィ

ル》という讚美歌用の指示とともに、《ルソー》の名が記され、加えて作詞者としての《ウオッツ博士》の名が掲げられている。ここではまず、その歌詞の第一節を紹介してみよう。

しーっ！ 私の赤ちゃん、静かに横になって、おやすみ

聖らかな天使たちがお前のベッドを守ってくれる

天の祝福が数え切れないくらい

やさしくお前の頭にかかってくる

お前が立ち会えたのはずっとすばらしいこと

神の御子であるよりも

夫より御子が降りたまい

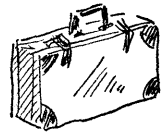
お前のような幼な子となりたまいし時に

この歌詞からも明らかのように、この《ルソーの夢》にアダプトされたテキストは、幼な子を眠りへといざなう《子守歌》であるとともに、幼な児イエスをたたえる《讚美歌》でもあるという性格をもっている。《グリーンウィル》の指示からも明らかのように、この《揺り籠讚美歌》は、まさに讚美歌から子守歌への移りゆきを、讚美歌から子供の歌への移行を示している典型的な実例というべきであろう。

(つづく)
(国立音楽大学)

☆世界の子どもたち☆

カナダの幼児教育



古賀嘉寿子

カナダの西海岸にある海と山、湖と森林とあらゆる自然の美しさに恵まれました都市、ヴァンクーバーよりおたよりを致します。

早いものでして、ブリティッシュコロンビア州のナースリースクールスーパーヴァイザーとしての資格を取って働き始めまして三年目を迎えました。こちらではキンダーガートンと呼ばれますのは小学校に属し、義務教育はキンダーガートンへ入る五歳から始まります。その前の年齢の子供達が行く幼児園をプレスクール、ナースリースク

ル、プリスクール等と呼ばれ三歳から五歳迄の子供達が二時間から三時間、集団の中で過ごす場になっております。

このナースリースクールは市の経営するコミュニティセンターに属してその一つのプログラムとして開かれているもの、教会の室を借りて母親達の協同経営として運営されているものがほとんどでして、日本の様な私立の幼稚園はあまりない様です。ほとんどが二部制で午前中に四、五歳児のクラス、午後が三歳児のクラスと云った具合に、一クラスだけ、しかも一人の先生で子供達の指導がなされて

おります。法律で一人の先生が十五人以上の子供を持てませんし、アシスタントがいた場合は二十五名迄、学校経営になりましても六十五名迄と決められておりますので、日本の様なマンモス幼稚園は、この国では許されません。

私の勤めておりますナースリースクールは市のコミュニティセンターに属するものでして、私は午前中二時間だけ働いております。採用になりましてもいっさいの教育方針等の指示も干渉もなく最初はとまどいましたが、これも一つの国民性なのでしょう。面接して採用したからには信じておまかせしますと言うのがやり方の様です。ただ問題がありました場合はなんの遠慮もなく止めさせられてしまいます。幸いに午後のクラスの先生が経験のある熱心なドイツ人で一年間何かと助言してくれましたので助かりました。こちらの自由保育の中で、日本で学び、経験したもののうち、こちらの子供に無理のないものだけを取り上げ、毎日の保育に生かしております。

一週間五日制でして、月曜日は三歳児、火曜日から金曜日は四歳児のクラスとなっています。アシスタントがいまさんので十五人の子供を受け持っておりますが、まるで違った個性を持つ子供達の成長を助ける側にしてみました

ら丁度良い人数の様に思います。それとカナダの子供達は、統率される事に慣れておりませんし、大変活動的ですので、これ以上の子供を一人で持つという事は危険でもあります。私共のナースリースクールは、広いコミュニティセンター内にありますので、二階の体育館へ連れて行く場合等、勝手に走り出されては危いと思ひまして二列に並ばせて行く様に躰けようとしたのですが、一週間してみまして無理な事がわかり諦めました。二人で手をつなぎ決して走らないお約束だけをしておりますが、この程度ですらなかなか守れないと云った現状です。

カナダ人を中心にヨーロッパ各国から来た子供達、中国人、インド人等アジアの国々からの子供達といたってインターナショナルですので、国際児童年を迎えるにあたりまして、世界中の子供達の幸せを願います気持ちも自然に出てまいります。一人当りの広さも規定されておりますので、広いお室に十五人の子供達がぶつかり合う事もなく、のびのびと遊びを展開し、私共保育者は、集団生活をよりスムーズにするためのスパーヴァイザーと呼ばれ、ティチャーとは資格上呼ばれません。工作の道具一式の置いてある図工のコーナー、粘土やおままごと、母親の使い古したア

クセサリーやドレスの置いてあるハウスキーピングコーナー、大工さんのコーナー、大きな積木のコーナー、レゴやパズル等をして遊ぶコーナー、読書のコーナー（四週間毎に図書館へ行き絵本を二十冊借り出してまいります）それに私共のナーズリースクールは恵まれていまして、三輪車やワゴンを乗りまわして遊べる広いお室がもう一つ続いております。

九時半に登園してまいりました子供達は母親に別れのキスをし、先生との挨拶をすませますと自分の好きなコーナーへ行き遊び始めます。私はだいたいの計画を立て、単元にそって毎日図工のコーナーで子供達の製作指導を致しますが、これも一斉と云うのではなく、作りたくなった子供が三々五々やってまいりまして何かを仕上げ、又次の遊びにもどってまいります。カナダの子供達は東洋人、特に日本人や中国人の子供達より不器用で少し、一つの事に集中する時間も短く落着きがたりますが、反面何事も恐れず、がむしゃらにとっ組んでまいります様なほほ笑ましいところもあります。

九月に新学期が始まり最初の一、二ヵ月位は何をしてよいかかわからずボンヤリしていた子供達、母親から離れら

れなくて泣いていた子供達も、クリスマスを過ぎる頃から集団生活にも慣れ、いくつかのグループに分かれて遊びがスムーズになってまいりました。この頃はあまりにも遊びが発展し、どこでさあ片付けましょうと声をかけたものやらと迷う事度々ですが、一時間ちょっとの間、こちらのコーナー、あちらのコーナーと自分の興味に合わせて動きまわり、充分に遊んだ子供達は満足して片付け始めます。片付けの後、手洗いにいき、全員テーブルについておやつをいただきます。その後はサークルになってゲームをしたり、音楽に合わせて楽器を楽しんだり、歌ったり、全員一斉に致しますが、一日のしめくくりの気持でカリキュラムにしたがって何かをさせなくてはという気持はありません。お天気の日には自由遊びがお庭になったり、おやつの後で外へ出たりとその日の子供達の状態が変わってまいります。

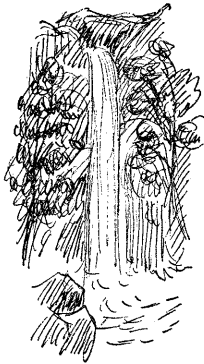
どこの親も子供を思う気持は同じだと思いますが、カナダ人は子供達がナーズリースクールへ喜んで行き、安全に楽しく遊んで来てくれるならよしとし、それ以上の要求はいっさい致しませんので、子供に無理強いする事なく、長い眼で観察し、子供同志の遊びの中から色々な事を学び取らせる様に出来ますので、実にやりやすい様に思います。

歴史も浅く、住んでいる人達全員が世界の色々な国からの集まりで一つの家という観念がないせいか、親が自分の子供も他人の子供もあまり変わらない眼で見る態度にはいつも感心させられます。いけない事、危険な事をした場合、他人の子供でもかまわず厳しく叱りつけますし、反対に良い面も素直に認め喜び合います。でも玩具の取り合い等で一人の子供がぶつたりしているのを、たまたま側にいた母親が見付けたりしますと、ものすごい声で怒鳴りつけ、ぶつた子供に対してお前は悪い子供だときめつけてしまますのには少々閉口しておりますが――。

自分の感情をおさえる事は少しもこの社会では美德ではありませんので大人も子供も自分をむき出しにしてぶつかり合う様を見ますと今でもとまどいます。したがって日本の甘い態度で子供に接しておりますと、いう事を聞いてくれないので、大声で叱りつけなければならぬ事もあります。五歳位まではあまり問題なく素直に聞いてくれます。仕事を探しておりました時、日本人は優しすぎた子供達がいう事を聞かないので動まらないのではないかといわれましたがこの年齢ではそんな心配はいりませんでした。ただ感情の起伏が激しく情緒的にも不安定な子供が多

いので、わめき始めた時に手がつけられず、そんな時には黙って小さな室へ連れて行きしばらく一人にしておきます。そして落ちてから話し合う様にしております。

結婚致します前、三年程日本のキリスト教系の幼稚園で働いた経験しかなく、その後は育児、家事に追われまして十五年のブランクがありましたので、最初幼い子供達に接しました時は緊張でふるえてしまう程でした。子供達の名前を覚えると云う単純な事一つにしましても大変な仕事だったので、言葉や習慣は違いましたが、ぐんぐん成長している幼い子供達はどこも同じで、彼等の成長を見守りながら、よき助け人になりたいと願う毎日です。



クリちゃん動物園散歩(五)



根本進

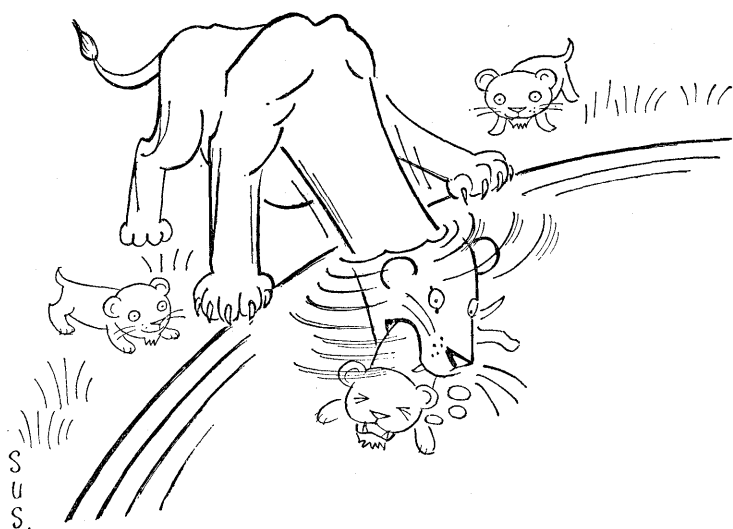
ドイツには、動物の数や設備の充実しているので有名な動物園がいくつもあります。ケルンの動物園もその一つです。

もう七、八年前になりますが、そのころ南米や東南アジア、そしてマダガスカル島などの珍らしい猿たちが沢山揃っているのにすっかり感心して、ここへ三日間通いました。そのおかげでめったにない場面にも出会う事が出来ました。

ライオンが赤ちゃんを産んで一ヵ月だったか、四十日だったか忘れましたが、その母親を子連れで今日はじめて父親といっしょの檻に入れてみるという事でした。先に広い放飼場

に入っていた父親は、しばらく振りに戸口に奥さんの姿をみてさぞ嬉しかったのでしょう。先方の御機嫌もかまわず、さっと一氣に近づいて行きましたが、一メートルぐらいそばまで行った所で突如一喝、猛烈な攻撃を受けました。その時の一声の大きかったこと、爪をむき出しにした前肢の電撃的パンチの物凄かったことといったらありません。私の心臓が一瞬ドキンとして止った気がした程でした。

立派なタテガミの雄ライオンでしたが、くるりと後を向き尻尾を巻いて逃げて行きました。その一目散振りが面白かったこと、母親とは本当に強いものなんだなあという感銘は忘



れられません。

それからすぐ後に続いて起きたアクシデントも興味深いものでした。怒った母親の足もとには何もわからぬ三匹の赤ん坊がキョトンとした顔であたりをみていましたが、その中の一匹はヨチヨチと池のふちへ歩いて行き、足を踏みはずして水中に落ちてしまいました。静かだった水面から波紋がみるみる広がって、それから母親の眼に映ったのでしょう。母親はびっくりして水辺に駆け寄りました。

池は急に深くなっているらしく、浮きつ沈みつアップアッブやっています。母親はいままでとは打って変って、オロオロオドオド。父親をたたいたばかりの前肢を今度はなるべく柔かに使って、赤ん坊を抱きかかえようと水の中へさし出しますが、生憎体にさわると赤ん坊は水中に沈みます。

二、三度こんな事を繰り返して無駄とわかると、今度は両前肢を池の端にふんばって顔を水中に入れました。深く、しまいに首までつっこんで、やっと赤ん坊の胴体を噛んで引き上げました。

池からすこし離れた草の上で、赤ん坊を口から放すと、赤ん坊の体中を何度もたんねんに舐めまわしています。これでもしアフリカの野生生活だったら、あたりには敵

だらけ、例えばワニが音もなくスーッときてパクリ……。などと起りそうな場面を想像しながら、それにしても数分の中に怒り、慌て、そしていまは全くホッとした様子が、すっかり人間の母親と変らぬ感じでした。

同じ日の午後、別の母親ライオンから大きくなった子どもを引き離す作業がまた大変でした。

ライオンは何処の動物園でもよく生れて元気に育つので、増え過ぎても処方に困るようです。いまここでは去年生れたオスの仔をサーカスが引き取りにきていましたが、まず運搬用の檻に母親といっしょに移して、この檻の中でタイムイングよく仕切って別々に分けようとしているのです。ところが動物のカンはその危険を察していると見えてこの母子は片時も離れようとしません。そこでこの母親が以前に産んだ二歳のメスを別の檻に入れて近づけ、これを木の棒でつついてそっちへ母親の気をひこうと試みました。

棒でつつかれた若メスが悲鳴をあげると、これを見ている母親は本当に怒り狂ったように吠えだてます。なんとムゴイことを……と思いつつもこは我慢、コンクリートの地下室にこたますその咆哮の物凄さといったらありません。でも離れまいとする仔は、もう可成り大きいのに母親の腹の下

にもぐり込んで動きません。

「全くこれではツンポになつてしまふ」気まぎらわしに私はそんな独り言をいってみましたが、実は怒り声が心に痛く響いて、とうとうこらえきれず途中で帰ることにしました。

廊下の続きには、虎、豹、山猫……と寝部屋が続いていましたが、同族の怒り声に聞き耳をたてている他の猛獣たちは無気味にシーンとしていたのも印象的でした。

この動物園では飼育係員にvari種の人がいきました。

彼に出会ったのはサル山(カニクイザルだったと思います)で、数人の飼育係員が何かを調べるためか子防注射のためかサルを捕獲していました。大きな網を持ってサルを追いかけるのですが、相手ははしっこくてなかなか捕りません。それに人間が急傾斜の擬岩の山に登るのも大変です。ただ一人実に素早くサルを捕えている若い係員がいきました。

作業が終つてみんなが一息入れた時に、「あいつは全く猿を捕えるのがうまい」とみんなが賞めていましたが、当人は疲れた様子も見せず私に向つて「あなたは日本人か？日本のサルについてききたい……」と話しかけてきました。どんな事をきかれて、私がどんな事を答えたかも忘れませんが、少し話す中に彼はオーストラリア人で、鳥の研究者、——特

にアフリカのオウムについて勉強したくて、現地へたどりつくまで方々の動物園でアルバイトをしながら旅をつづけているのだと言うことで、「どこのZOOでもボクの本業そっちのけにしてサルを捕えさせられる」と笑っていました。目的地に着くまで何年かかると思っているかときいたら「さあ、あと四、五年はかかっても仕方がないね」と、全く覚悟がないのです。

それはそうかも知れません。どこの動物園でも飼育係がその仕事に馴れるまでにはすぐ半年や一年たってしまうでしょうから。それはともかく動物園の飼育係には面白い人がいます。

動物園が好きになったお客は大抵親切的な飼育係員に出会いいろいろな教えられたのがきっかけで……という人が多いでしょう。

私が上野動物園によく行く様になったのも、いまは東武動物園の園長の西山登志雄さんが話しかけてくれたおかげだと思っています。

当時古賀忠道さんが上野の園長で、戦後の園内は紙クズがいっぱい散らかっていて、いくら屑籠を用意しても、なかなかこの中に入れてくれる人がいない、何とかしてみんなが紙

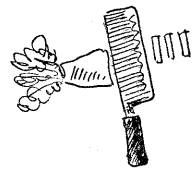
くずを屑籠の中に入れてくれるようにいい知恵はないかと私に相談がありました。結局私はクリちゃんやタコといっしょに紙クズを拾って籠の中に入れていた絵をかいで、それをホウロウ板を印刷した屑籠につけてもらいました。そんな事をした前後に、動物園の様子を知ろうとして園内をぶらついていると、西山さんが声をかけてくれて、動物舎の裏側へ案内してもらいました。

動物園の楽屋裏には、予備軍というか控えの動物というか、公開していない動物もいろいろいてあれこれ興味深く見せてもらっていると、突然ライオンがウォーッと檻の中から近くに飛びかかってきたのはキモをつぶしました。後で解ったのは、西山さんはそのころ河馬の飼育係員でしたが、仕事の合間のいたずらにライオンも手なづけていて、彼が行くとこんな風にとびかかる習慣をつけて人を驚かすことにしていたのでした。

(漫画家)

現職研究レポート

その一 H幼稚園の場合



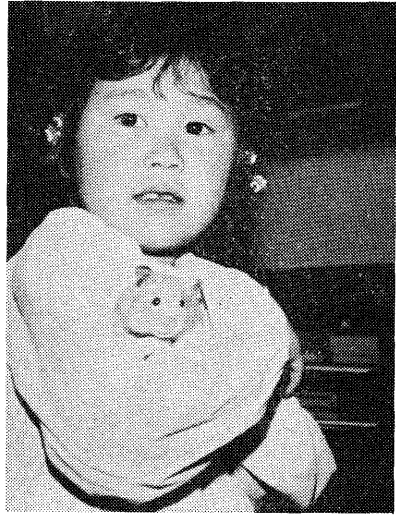
角能清美

幼児教育現職研究会の昭和五十三年度の活動は次のように行なわれた。東京及び東京近郊の八幼稚園が協力園となり、公開観察をし、それぞれの幼稚園がそのとき持っている独自の課題を明らかにし、自分たちの保育を見つめ直す作業をしたのである。

今回は、その第一報として、H幼稚園の場合を報告する。H幼稚園の公開観察日は五月十六日、第二火曜であった。この頃は四月に入園した子どもたちがやっと幼稚園に慣れ、自分の遊びを見つけて遊び出そうとする時期であった。

観察者たちはまず幼稚園の子どもたちがのびやかなことを感じ

た。ところがあまりにものびやかなためにけじめをどこでつけるのかという疑問も提出された。特に子どもたちの動物の扱い方が注目された。うさぎやハムスターが子どもにそっと抱かれている時には微笑えんでいられる保育者が、ハムスターを放り出した時、箱詰めにした時、あるいはザリガニが砂場で子どもに遊ばれているのを見ると、顔をしかめたくなってしまう。ちょうどこの頃、うさぎの「くろ」がケガをするという事件もあり、H幼稚園の先生方は動物の扱い方をどのように子どもに伝えたらいいのか、悩んでいたのだった。



「あさきたら、すぐにだっこするの」

そこでH幼稚園では「保育の中で動物をどう考えるのか」という課題が成立した。この課題のもとにそれぞれの保育者は様々に考え、実践していった。

保育の中で動物をどう考えるのか

各々保育者は、これまでの自分と動物との関わりをとらえ直すことからはじめた。保育者自身が動物に慣れないためになかなか

触れることができなかったことや、やっと本来の自分を出してき
たと思われる子どもたちに確信をもって「禁止」の声をかけられ
なかったことなどが挙げられた。

では保育者がどのような思いで動物を子どもたちの中に参加さ
せたのだろうか。五月から新しく登場したうさぎの「くろ」をめ
ぐって、担任のS先生の報告を掲げよう。

◆「くろ」がくるまで

四月。年少児三クラスを解体して、新しく年長の「つ
きぐみ」として集まった二十九人の子どもたち。女兒は
全体的に静かな活動を好む子が多く、男児は一人一人が
違った活動をはっきり示し、二、三人で散らばって遊ぶ
傾向があった。

その中でM男のことが気になっていた。M男は定まっ
た友だちはいないが、ブロックや木工などを黙々と作り
上げていく創造力の豊かな子どもであった。しかし妹の
M子が年少組に入り、M男は妹のことが気になるのか、
M子のクラスにずっと出入りしていた。M子が兄である
M男とは関係なく、他の友だちをつくっていくことに対

して、何かすっきりしないらしく、M男本来の活動がでないでいた。

M男は年少組の頃から動物が大好きであり、自分の分身のように扱った。「ジャンボ」という名の大きなうさぎを軽々と抱きあげて遊んでいたものである。「ジャンボ」は年少組で飼われているため、現在ではM男は二匹のハムスターを両手にもって、一日中歩き回って過していた。M男は自分の安定しない気持ちを手の中で動き回るハムスターに慰めを求めているように見えた。

一日中M男の手の中にいるハムスターは小さく、私は心配だった。M男のためにもっと大きな動物を飼いたかった。M男のためばかりでなく、ばらばらと散らばっているクラスが何かを育てることでひとつになるのではないかと思った。そこにちょうど卒園児の父兄から「うさぎを寄付したい」との申し出があり、私は飛びついた。

S先生は、クラス全体がばらばらしている状況を見て、どうにかならないだろうかという思いの中で、特にM男に目が向いていた。妹が入園してきたためにM男は不安定になっており、ハムス

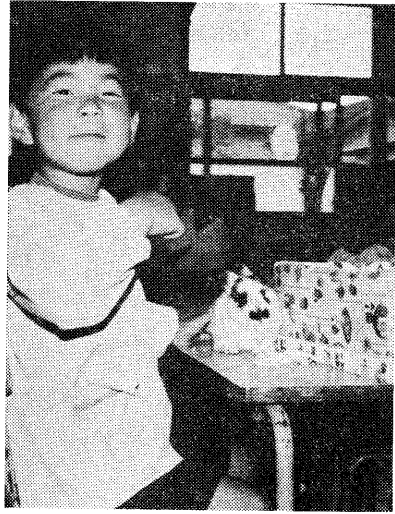
ターを抱くことで安定するように努めていると考えた。もっと大きな動物をM男に与えたいという願いと、クラスで動物を育てることによって、クラスの子どもたちがひとつになってくれたらという願いのもとに、うさぎが「つきぐみ」の子どもたちにもたらされた。

さて、子どもたちはうさぎとどのように出会い、過したのだろうか。再びS先生の報告を掲げる。

◆「くろ」との出会い

五月。三日間の連休が終わって登園してきた子どもたちは、黒と白のまだらの小さなうさぎを見てびっくりした。「かわいい！」「どうしたの？」「つきぐみでかうの？」次々に質問してくる。皆、いっぺんで気に入った。他のクラスの承諾も得て、つきぐみで飼うことになった。二日間かけて話し合った結果、「くろちゃん」と名づけられた。

M男が一番先に「くろ」を抱いて遊びだした。M男はにこにこ顔である。ほとんど一日中「くろ」を抱いていることもある。「くろ」はM男の腕の中でゆられて、目



「くろちゃんにキャベツあげてるんだよ」

を白黒させている。

T男も「かわいい」と言っていて「くろ」を抱く。しかしすぐにM男が「おい、かせ」と言っていて連れていってしまふ。それでT男は登園時間より早くくるようになった。

餌をあげたり抱いたりして、朝のひとときを楽しんだ。

K子も「くろ」の行方を一日中追っていた。私がうさぎの抱き方を話すと、それを皆に伝えた。そしてM男のすきを見ては抱いた。「くろ」ははじめはK子の腕の中で落ちて着かなかったが、K子の抱き方が上手になるにつ

れてじっとしていた。

I子は、他の子どもの「くろ」の扱いを見ていて、「あんまりやるとかわいそう」と言ったり、「こうやって抱くんだよ」と教えたりした。

またJ男、H男、S男の三人は、ままごとのコーナーの籠の中にふとんをしき、「くろ」をそこにそっと入れて、餌をあげたり、抱いたりした。

どの子どもも「くろ」がきたことをとても喜び、ちょっとでもいいから抱きたいという気持ちが強かった。数人の子どもたちが一日中、自分たちの遊びの中に「くろ」をいれていることが多く、なんとかして抱きたいと思う子どもたちの気持ちに交差して、「くろ」の取り合いのけんかもみられた。逆にM男とK子が「くろ」を仲介して一緒に家をつくって遊ぶようになった。

子どもたちが非常に喜んでうさぎの「くろ」を仲間として受け入れたのかを知ることができる。「くろ」を籠の中に入れておくことに届まらず、ほとんどの子どもはうさぎを抱きたいという強い希望を叶えようとした。その結果、「くろ」はいつも子どもた

ちに抱かれているか、あるいは餌を食べさせてもらっているかということになり、とにかく子どもたちの遊びに参加させられていたのだ。S先生は、うさぎの抱き方を子どもたちに指導した。しかしうさぎの「くろ」が常に子どもに抱かれていることに對する不安を直接子どもたちに伝えてはいない。うさぎは大丈夫だろうかと思いつつ、M男が「くろ」を抱いていることで安定し、その上「くろ」を介してK子と遊べるようになったことや、ほとんど保育室にもどらなかったI子が「くろ」の様子を見に保育室にもどるようになったことなどを見て、これでいいのだと自分言い聞かせるように毎日を送っていたのである。

ところがS先生の心配が現実となってしまう。それが「くろ」の病気である。

◆「くろ」の病気

五月の三週目の月曜日のこと。「くろ」の腰のあたり
に血が見えた。よく見ると、毛がめくられて赤い皮が見える。「あっ、けがをしている」と私とM男が気づき、すぐに籠の中にもどしてやる。M男は「せんせい、（くろは）けがをしています。（だくのは）きんしってかいて、

みんなにしろせよう」と言い、籠の入口と幼稚園のあちこちの壁に貼る紙をする。

私は「くろ」がけがをした、そのときを知らなかったし、当然その原因もわからなかったため、自分の迂闊さと、小さなうさぎを抱かせっぱなしで大丈夫だろうかという不安が現実となって、しまったという気持ちが強かった。

子どもたちと相談し、獣医さんに診ていただくことにした。保育後、偶然近くにいたT男、I男を誘って診察をうける。二人とも真剣になって「かわいそうだね、くろはこわいかな」とやさしく見守る。「くろ」は皮膚病になっており、腰のあたりの毛をすっかり刈られ、赤チンと緑色の薬を塗られた。かなり悪くなっており、「もっと早く治療をうけていれば……」と医者に言われ、私は答えようがなかった。

翌日、「くろ」のこのような姿に子どもたちは何も言えなかった。私が薬をつけ、籠の新聞紙を取替えるのを女児たちは見守っている。降園前の集まりで「これから私たちはくろに何をしてあげられるか」を話し合い、餌をあげることに、良くなるまで静かにしてあげること、薬

をつけてあげること、家をきれいにしてあげてあげることを書いた。二、三日たつて子どもと一緒に薬をつけているとき、「くろちゃんかわいそう」「助かるかな」「死なせたくないよ、まだきたばかりじゃない」と言う。

◆その後

子どもたちは「くろ」から離れて遊び出した。「くろ」に頼っていたようなM男も、木工や泥粘土で楽しむ姿も見られるようになった。他の子どもたちも以前より親しみをもち友だちと関わるようになった。女兒はままごとで活発に遊ぶようになった。

子どもたちは自分たちの仲間としてうさぎの「くろ」と関わった。そしてそのような関わりがあったからこそ、「くろ」が病気になることがわかったときに、子どもたちは「くろ」の立場になつて感じたり、考えたりしたのである。「くろ」の皮膚病を未然に防ぐことは可能であったかもしれない。しかし、「くろ」が病気になるたとき、子どもたちは「うさぎ」という生き物である「くろ」に気づいたのではないだろうか。もちろんそのためだからといって「くろ」が病気になることは軽視されることなく、

考えなければならぬ問題である。

S先生はこの点について次のように考えている。

「私にとって動物は子どものためにあるものである。飼い始めた時はこういう結果を予想していたわけではなかったが、今でも思いは同じである。しかし、何かそれだけでは済まされないものが私の中にある。子どもたちには「くろ」をかわいいと思う気持ちがあったのか。生命あるものに対して私自身の心づかいはたりなかった。保育の中では保育者のものの考え方が何かの形で伝わっていくと思う。この点について私の心構えは反省させられる。

また、子どもたちにうさぎの扱いをすべてまかせるのではなく、私自身が心配だと思えば、そこで子どもに私の考えをぶつけていくこともできたはずである。私の考えを受け入れたり、「でも、こうしたい」など、自分の考えを言い出す子どももいただろう。一緒に何か良い方法をみつけれられたかもしれない。保育していくこと”の姿勢を反省させられた。

それにしても、あちこちに散らばっていた子どもたちが一瞬であつても、ある一点に目を向けさせるほど、うさぎという動物は子どもにとって魅力あるもの、かけがえのないものである。餌をあげたり、撫でたりという接し方にとどまらず、自分の遊びの仲間に入れて、自分と同じようなことをさせるのが見られた。動物

と一体になる、あるいは一体とさせようとする。

動物本来の生き方を考えていくことも必要であるかもしれない。しかし『くろ』が治ったところで、また起きてくるだろう動物の扱い方に関して、動物を自分の仲間と思って遊ぶ子どもたちの気持ちをどうみていったらいいのか、私はまた迷うかもしれない。

S先生は「生命あるものに対して私自身の心づかいはたりなかった」と反省しながらも、「動物を自分の仲間と思って遊ぶ子どもたちの気持ちをどうみていったらいいのか」と問うている。これは、保育の中で動物を扱うときに保育者が直面しなければならぬ課題であろう。

保育の中で動物をどう扱うのか

H幼稚園の公開観察日の翌週に、H幼稚園はじめ協力園の保育者たちによって、「保育の中で動物をどのように扱い、考えたらよいか」をテーマにゼミが行なわれた。

ここでは主に次の二点を中心に話された。

一、子どもが動物をかわいがっているのだからということで、保

育者は子どもがしていることをすべて許してしまっているのだろうか。

二、子どもが動物にしていることに共感してしまった時に、おとなとしての保育者をどのように位置づけたらよいのだろうか。

それぞれの代表的な意見を次に掲げよう。

まず第一点について

「保育者は、幼稚園で動物を飼うことによって、子どもに何を育てたいのかということをしつかりと理解していなければならぬ。動物を飼うのはいい。しかし子どもが動物をおもちゃのように扱ったときには、はっきりと禁止すべきである。動物が『かわいそうだから』ということ、子どもに思いやりを育てるということではない。保育者は、おとなとして共感しつつ、どうしていったらいいのかを考えることがたいせつである。保育者と子どもとは人間として付き合いをしているのだから、人間として、動物がかわいそうに思ったならば、『かわいそうだ』と言ったり、人間としてほしくない時には『いやだ』と言ってもいいだろう。子どもが動物をおもちゃのように扱った時に、保育者がとめることができないうなら動物を飼わない方がいい。動物をだいにかわいがって育てることができなければ飼わない方がいい。」

次に第二点について

「動物を扱っている子どもと共感して、その上でおとなとしての役割を考える。たとえば、小さいハムスターと大きいハムスターを同じ籠の中に入れて、ハムスター同志がすさまじいけんかをして、小さいハムスターがケガをした。そのとき、たまたまハムスターがケガをしたために子どもも保育者も反省したが、もしケガをしなかったらどうしただろうか。二ひきのハムスターがいつもけんかをするのだろうか。ハムスターの習性は一びきずつ違う。この場合には、ケガをしたハムスターを見て『かわいそう』と子どもと共感する。あるいは保育者は何も言わなくてもいいのかもしれない。おとなとして、すぐその場で感じたことを話したり、話さなかったりする。これがおとなとしての成長なのだろうか。」

動物を死なせてしまうくらいならば飼わない方がいいという意見がある一方、もし動物が死んでしまうような事態が起きた場合にも、まずそれを受け入れ、その上で子どもにどのように対応していくのかを考えることが保育者の成長につながるのではないかという対立する意見がいたのである。

この課題には正答はないだろう。どちらの立場をとるのかについてはそれぞれの保育者にまかされるのである。保育者は場面々々に応じて、禁止したり、拒否したり、あるいは共感したり、だ

まっていることになる。

現在、それぞれの幼稚園によって、子どもがどのように動物と関わっているのか、また保育者はどの程度配慮しているのか、その方法は様々である。

子どもにとって動物は不可欠の存在であることは確かだろう。そんな動物を保育の中でどのように扱っていくかということについては、それぞれの保育者とそれぞれの子どもがつくり出していくものようである。これはまさに「保育」を考えることなのである。

(秋草学園短期大学)

「かくれんぼ」に熱中する子どもの表情は、それぞれに興味深いものがある。

一人、物かげに身を潜めている子どもの全身は、「かくれおせたい」という願望と、「もし見つからなかったら」という不安とで、微妙なおののいている。二人で手を携えて、すみっこで息を殺す仲よし同士は、しのび笑いを押さえかねて「秘密を共有する喜び」に恍惚としている。そして、誰もいなくなつた世界を、単独で開拓すべく義務づけられた鬼の表情は、限りなく孤独に見えるだろう。

「逃げる・追う」「かくれる・見出す」という、最も基本的な、但し、相反する二つの動きを対にすることで成り立ったこの遊びは、そのどちらに身を置くかによって、世界を異なつた視覚でとらえる機会を用意している。鬼にとつても、かくれ手にとつても、世界は、常ならぬ相貌をあらわにするだろう。そして、降り

注ぐ白日の光の下にも、依然として横たわる深い闇の存在を告げ、人間が一人であること、そのゆえに他者を必要とすることに気付かせるのだ。

子どもの遊びの衰退が歎かれ、遊びの種類の激減が憂えられて久しい。そんな中で、「かくれんぼ」は、比較的よく遊ばれるものに属し、恐らくは、生きのびる遊びではないかと推測されている。性別も年齢も問わず、格別の道具も不要、ルールも単純という、あの素朴さがこの遊びを支えているとも言われている。

然し、「かくれんぼ」は、先に触れたように、明かると暗さを同居させている。それは、このプリミティヴな遊びが、単なる子どもっぽい時間つぶしではなく、人間の深層に錘を下ろすしたたかな綱を、その中に秘めていることを証しするものと言えないだろうか。

(本田和子)

幼児の教育 第七十八巻第九号

九月号 ◎ 定価二五〇円

昭和五十四年八月二十五日 印刷

昭和五十四年九月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

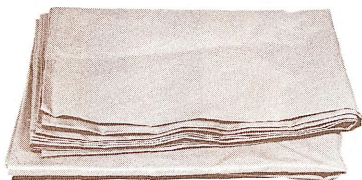
◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

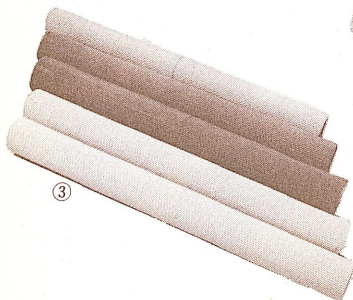
フレーベル館の 絵画・素材用品



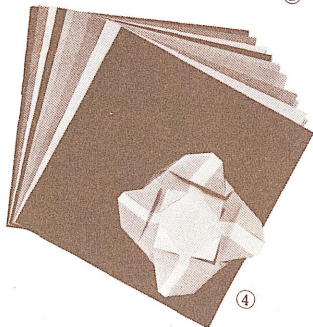
①



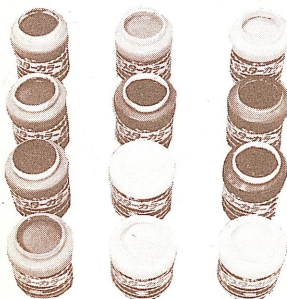
②



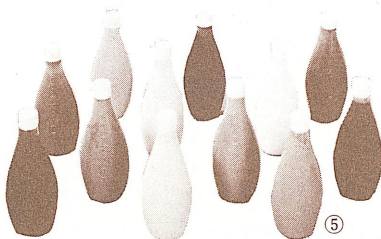
③



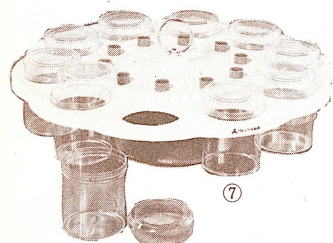
④



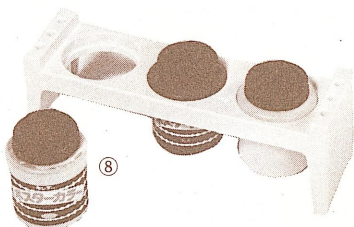
⑥



⑤



⑦



⑧

- カラーモール
10色 1,000本(各色100本)
1セット 3,500円
- ニューボール
5色 250本(各色50本)
1セット 4,500円
- 発泡ボール
50個 1セット 大1,600円
100個1セット 小1,200円
- 不織布(ロール巻)
2本1セット 5,000円
写真①
- 竹 ヒゴ
2束(1束100本)
1セット 1,600円
- 造形シート 写真②
3,500円
- 色段ボール(ロール巻)
4色10本 写真③
1セット 2,800円
- 両面おりがみ 写真④
10色1セット 3,500円
- クレープ紙
8色1セット 1,600円
- 壁画セット
10色1セット 1,500円
- キンダーポスターカラー
12色1セット 8,400円
写真⑤
- キンダーポスターカラー-広口
12色1セット15,600円
写真⑥
- カラースタンドA
写真の直径42cm 5,300円
- カラースタンドB
写真⑧ 1,600円
- 絵 筆
20号10本 1組 4,200円
18号10本 1組 3,600円
16号10本 1組 3,100円
10号10本 1組 2,000円
- 刷 毛 300円

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

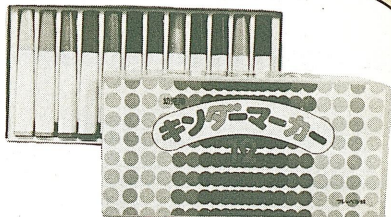
“たのしいプレゼント品”



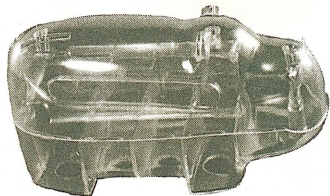
バケツ 4色各250円



運動会用メダル 170円



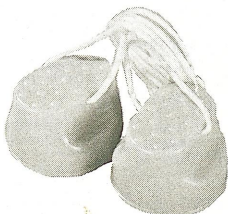
キンダーマーカー
8色 450円
12色 660円



ちょきんぼこ 250円



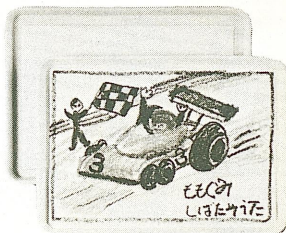
幼児用スリッパ青赤各450円



キンダーポックリ 470円



ふね 250円



がくとレー皿 180円



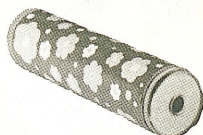
なわとび(A)370円



なわとび(B)230円



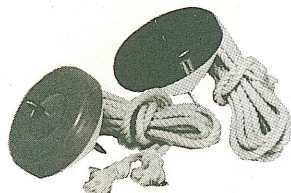
けん玉 350円



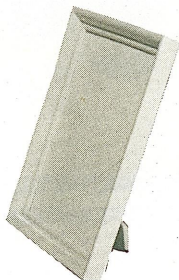
万華鏡 150円



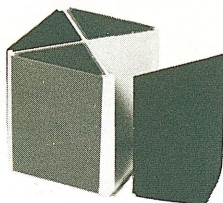
幼児トランプ 250円



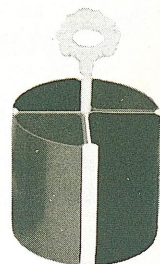
安全コマ 2色各350円



額縁 200円



スクエアラック筆立 300円



ラウンドラック筆立 350円